

42323

教科書文庫

4

810

42-1934

2000301817

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

G Y M

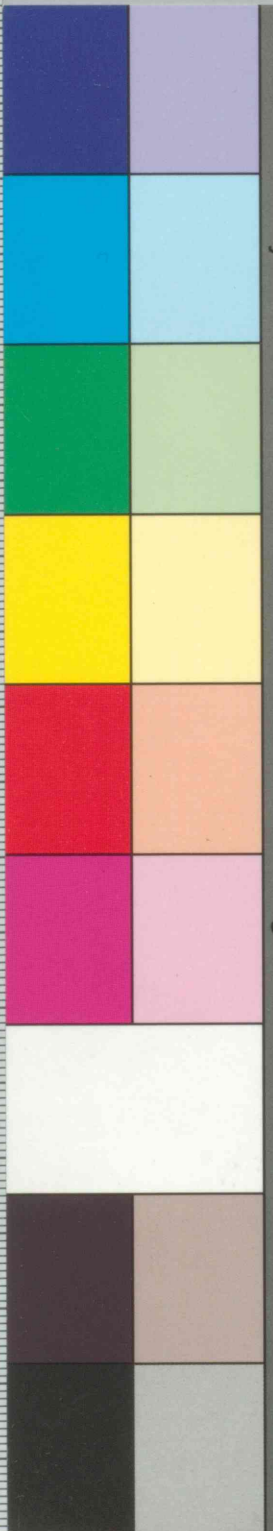
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8  
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



2 1 20 6 8 7 9 5 4 3 2 1 10 6 8 7 9 5 4 3 2 1 0

375.9  
Da19  
資料室

最新女子國文讀本  
稲田 卷一

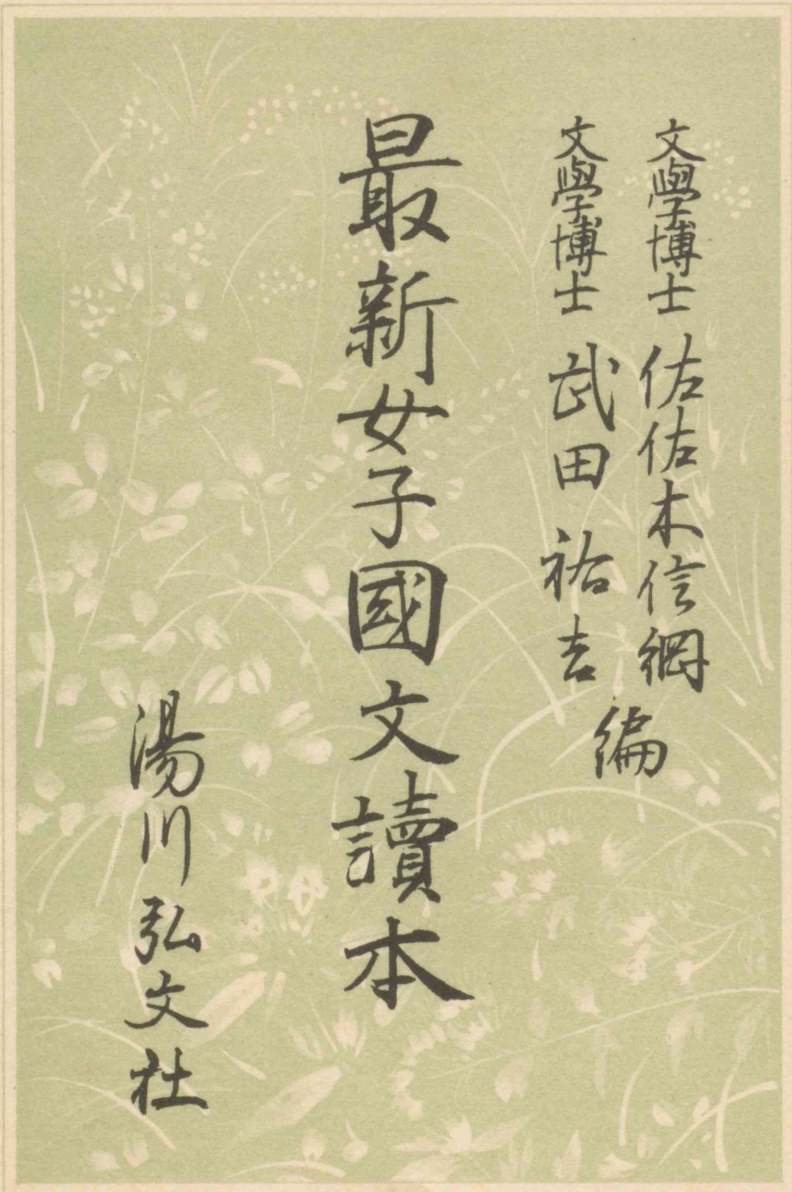


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

3759  
Na 19

文部省檢定

昭和九年十一月二日・高等女子學校國語科用



文學博士 佐佐木信綱 編  
文學博士 武田祐吉

最新女子國文讀本

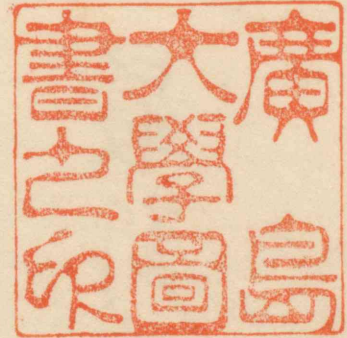
湯川弘文社





山本森之助筆

芙蓉峰



最新女子國文讀本 卷一

目次

一	日	本			
二	櫻				一
三	爽やかな心		河野省三		二
四	千里の春		大和田建樹		三
五	ロンドンに於ける東宮殿下		二荒芳徳		二六
六	皇太子殿下御浴湯の儀に奉仕して		市村瓊次郎		三八

目

次

一

七	皇軍の精神	東郷平八郎	四六
八	落棒	二葉亭四迷	五〇
九	朝の鳥	高濱虚子	五二
一〇	母と蘆	西條八十	五七
一一	水郷夏趣	杉村楚人冠	六二
一二	クリミヤの天使	野邊地天馬	六八
一三	静かな日	佐佐木雪子	七六
一四	七月の星座	吉村冬彦	八一
一五	眞夏の海	北原白秋	九〇
一六	國境に立ちて		九二

一七	林より街より	九條武子	一〇三
一八	滅びぬもの	吉屋信子	一〇九
一九	この一躍	人見絹枝	一一四
二〇	伊能忠敬	幸田露伴	一二五
二一	壺と提灯	柴田鳩翁	一三二
二二	四季小品	徳富蘆花	一四〇
二三	讀書の樂み	〔益軒十訓〕	一四六

〔自修文〕			
一	子犬	二葉亭四迷	一五一
二	新緑の奈良	荻原井泉水	一六三

三 最後の授業

附録

主要象形文字表

國語假名遣表



最新女子國文讀本 卷一

一日 本

深紅 シンク。  
朝 アシタ。

黄海 朝鮮半島・濟州島・揚子江河口北端に圍まる、海面。  
碧玉を溶かす

波間を分けて昇る旭日に、富士の高嶺は深紅に輝いてゐる。この朝、太平洋を越えて、故國に近づいて來た船には、その氣高い姿を仰ぐ感激の聲ばかりが満ちてゐる。  
支那大陸から、濁りに濁つた黄海を航して歸り來る船も、對馬海峡に入るに及んで、はじめて洗はれた思を成す。碧玉を溶かしたかと疑はれる海水は、日光を受けて、波のしぶ

明媚  
メイビ。山水の  
景色の美しきこ  
と。

きさへ紫にうち煙る。島ある處、老松は岩に懸つて、この歸朝者を喜び迎へるやうである。  
美しい日本。風光明媚なこの國に生れ出た我等の幸福を想ふ。

富士山の如き美しい山は、世界に多く類は無い。瀬戸内海の如き麗しい海は、他に多く比を見ない。しかし風景の美しいだけが、日本の全部では無い。景色の佳い國ならば、外にも無いとは云へない。高山と湖水とに恵まれ、世界の公園と呼ばれてゐる瑞西の如き、その尤なるものであらう。日本の尊い所以は、實にその國體にあり、その歴史にある。上に萬世一系の天皇を戴き、萬民皆兄弟の如く一致協同

瑞西  
スイス。歐洲中  
部にある共和  
國體

覘ふ  
ネラふ。

してゐるこの國體こそは、世界に比類が無いのである。古來、我が國を覘つて、侵略して來る外敵もあつたが、未だ嘗て一度も汚されたことの無い歴史が尊いのである。

かやうに萬國にすぐれた國體を戴き、かやうに世界に類の無い歴史に育てられて來たのが、我等日本人である。我等日本人は、祖先からこの國を受け傳へて來たのである。

平和なる外來者に對しては、何處までもこれを迎へて、その文化や知識を吸収すべきは勿論であるが、兵力や思想で我等を侵して來る者に對しては、協力してこれと戦ひこれを退けて、光輝ある我等の歴史を保つて行かなければならない。我等はあらゆる意味で我等の祖國を守り傳へなけ

文化

祖國  
祖先以來所屬せ  
る國。本國。

ればならない。

まづ身體や精神を一層健全にせよ。

女子の一生に取つて、今こそは、身體や精神を鍛鍊すべき重要な時代である。何者をも恐れず、よく正邪を區別し、光輝ある日本の歴史を傳へ行くべき基礎は、この時代に作られるのである。

今や陽春四月、萬朶の花は到る處に咲き満ちてゐる。この花こそは我等が精神の旗章である。朝日に輝く日章旗、この旗こそは、我等が意氣の旗章である。我等は日本人である。

日本の國は美しい。しかしこの美しい國に居る間だけ

萬朶  
バンダ。數多の  
枝。  
旗章  
キシヤウ。旗じ  
るし。

漲る  
ミナギル。  
棲息  
セイソク。

が日本人なのでは無い。場合によつては、この國を出て、海外に雄飛をする。黃塵、天に漲る支那大陸も、毒蛇や猛獸の棲息する赤道直下も、我等が活動の舞臺として、絶好の樂土である。而して世界の何處の果に行つても、我等は日本人なのである。光輝ある日本の歴史を、祖先から分けて貰つてゐる日本人なのである。

この歴史を汚さないやうな正しい日本人になるのが我等の任務である。今の時期に於て、學業に勉勵し、心身の修養に努力して、日本の國民たるに恥ぢざる人とならねばならない。



二 櫻

因む  
言葉の花  
和歌のことをいふ。

賀茂眞淵  
通稱は岡部衛士。國學四大人の一人。明和六年歿。年七十三。(二三五七—二四二九)

かういふ  
か。いふ  
か。いふ  
禮讚  
ライサン。

街にも園にも野にも山にも花の咲き満ちる時が來ました。この花の時に因んで、言葉の花に歌はれた櫻花について、述べようと思ひます。

賀茂眞淵の歌に、

うらくとどけき春の心よりにほひいでたる山ざくら花

長閑かな春の心から生れ出て、春の魂ともいふべきは櫻花であります。かういふ櫻花を以てつゝまれた我が日本の春を樂しむ我等はその幸をたゞへ、櫻花を禮讚せずには

居られません。

吹く風をなこそその關と思へども道もせにちる山櫻

かな

これは、源義家が、奥州征伐の途上の作であります。元來義家は、勇猛な武將でありまして、梁塵秘抄によつて傳へられた歌謠にも、

鷺の住む深山には なべての鳥はすむものか

同じき源氏と申せども 八幡太郎は恐ろしや

と、恐れられた武將であります。しかもその一面に、かういふ軍旅の途次に和歌を詠ずるといふやうな、やさしい心持もあつたのです。しかして、奥州に多くの關はあつたが、勿

なこそ  
勿來。茨城縣多賀郡に關址あり。

源義家

賴義の長子。鎮守府將軍。天仁元年歿。年六十八。(一七〇—一七六八)

梁塵秘抄

十卷。一部分現存す。平安時代の歌謠を集めたもの。後白河天皇の御撰。

軍旅

和

餘徳

來の關だけが此の一首によつて名所となり、數百年の後の

旅人がその跡を訪ふのも、歌の餘徳といへませう。

花も散り人も都へかへりな

ば山さびしくやならむとす

らむ

これは、西行法師の歌であります。

うき世をよそにふりすてて山にこもり、自然を心の友とした清い胸の底に、かういふゆたかな人間味があ



城の下 櫻

つたのであります。

西行法師  
俗名は佐藤義清。歌僧。建久元年歿。年七十三。(一七七八一—八五〇)

人間味

をさまらぬ世のひとつのしげければ櫻かざして  
くらす日もなし

これは、吉野朝の長慶天皇の御製で、花の名所である吉野山におはしながら、櫻を折るかざして遊ばせ給ふ一日だになかつた事を思ひ奉ると、涙のこぼれる御歌であります。

高殿の窓てふ窓をあけさせて四方の櫻のさかりを  
ぞ見る

明治天皇の御製であります。いかにも雄大で、眞に帝王の大御歌であります。古より今にいたるまで、花を見るといふ題の歌は数しれずありますが、これほど大きい歌はありません。而してこれは、明治四十五年の御製であります。

長慶天皇  
第九十八代。

五箇條の御誓文  
 明治元年三月十日、天皇が紫宸殿に御して神祇に誓ひ給ひし御誓文。  
 一 廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ  
 一 上下心ニ一ニシテ盛ニ經綸ヲ行フヘシ  
 一 官武一途庶民ニ至ル迄各其志ヲ遂ケ人ヲシテ倦マサラシメン事ヲ要ス  
 一 舊來ノ陋習ヲ破リ天地ノ公道ニ基クヘシ  
 一 智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ

が、かの明治元年、天皇が祖宗の神靈に誓はせ給うた五箇條の御誓文の一なる、廣ク會議ヲ興シ萬機公論ニ決スヘシ「また」智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」といふ遠大なる思し召から起つて、明治の四十五年間に、國威が世界に輝きわたるやうになつた御成果が、自ら花を見るといふ此の御製に歌はれたものと考へられます。もし明治時代の意氣をあらはした一首の歌をあげよといふならば、私はこの「高殿の窓てふ窓を」といふ御製を挙げたいと思ひます。

朝日影とよさかのぼる、日の本のやまとの國の春の  
 あけぼの  
 (佐久良東雄)

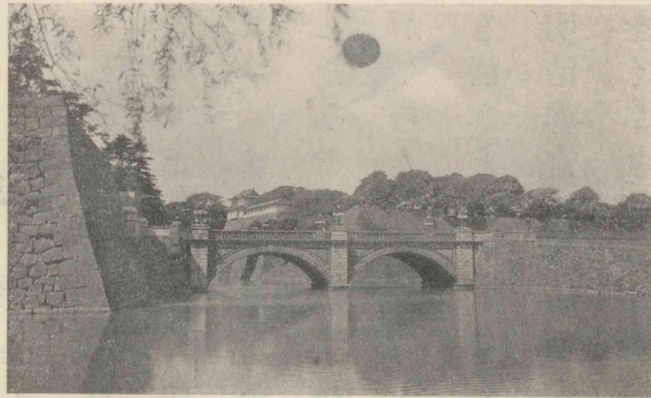
みやびやか

明治神宮  
 官幣大社。明治天皇・昭憲皇太后を奉祀す。東京市澁谷區にあり。  
 清々しい  
 スガスガしい。

### 三 爽やかな心

私どもは、晴れた日に、東海の天に聳える富士山の姿を仰ぎますと、何となく麗しい崇高な氣分に打たれるのであります。また朝日に映る山櫻の姿を眺めますと、自然に晴々としたみやびやかな氣分になるのであります。日の丸の旗がひらくと、翻つてゐるのを見ますと、そこに活動的な活き活きとした氣分が起つてくるのであります。或はまた明治神宮に參拜いたしましたして、神宮橋を渡り、白木のお鳥居をくぐり、清淨な參道を吸込まれるやうに進んで、清い水で手を洗つて御社殿の前に參りますと、自ら清々しい尊い氣

神聖



分につゝまれてくるのであります。更にまた松の緑の滴るお濠の前に立ちまして、我が皇室の御繁榮を思ひますと、なんともいへぬ神聖な氣分が現れてくるのであります。

重 これ等の神々しい、清々しい、晴々

橋 しい心持こそ、實に我々日本人が、遠

い遠い昔から養つて來た心の眞の姿であります。建國以來、私どもの祖先が育てあげて來た純眞なる心は、全く我が國民性の本質でありまして、所謂大和魂の眞髓

所謂

イハニル。

眞髓

シンズキ。

であります。かゝるさつぱりとした、廣い、しかも力強い氣分の充ち満ちた心が、即ち本當の眞心でありまして、この眞心から出るこれ等の氣分こそ、最もよく人生を美化し、私たちの生活を幸福に導くものであります。

明治天皇の御製に、

さしのぼる朝日のごとく爽やかに持たまほしきは  
心なりけり

持たまほし

と、お詠み遊ばされてありますが、その爽やかな心は、取りも直さずかやうな純眞な氣分に外ならぬのであります。私どもがこの世に於て毎日々々の生活を營むに當りまして、最も必要な氣分であり、且價值のある態度は、誠にこの爽

屈託  
クツタク。

やかな心にあります。  
この爽やかな心は、晴々しい広い心持であります。徒に物に屈託しない、ゆつたりとした心であり、又濫りに他を排斥しない、穩やかな心であります。この心からして偏りのない爽やかな氣分を味はふことが出来るのであります。爽やかな心は、明快な裏表のない心持であります。濫味のある、生々とした生活は、世の中で最も望ましい生活であります。偽らない正直な態度は、最も力強い生活であります。宗教の生命も亦こゝにあると信じますが、天真爛漫は即ち爽やかな心の本體であります。

天真爛漫

建設的

朝日の豊榮昇る  
朝日が美しく榮  
え昇ること。

生活の原理  
傳統的信念  
看破  
カンバ。

心持でありまして、建設的に、有意義に、總ての物を生かしてゆく所の積極的精神であります。所謂朝日の豊榮昇る氣分が、即ちこの爽やかなる心の働であります。我々日本人は、かういふ爽やかな心を根柢としまして、この尊い國體を築き上げ、この立派なる國民道德を形造つて來たのであります。我が國民精神の現れである神道は、即ちこの爽やかな心を以て、その根本としてゐるのであります。神道については色々の説がありますが、畢竟はこの爽やかな心、純眞な氣分に生きる所の日本人の生活の原理で、日本民族の傳統的信念であると思ひます。この神道の精神を最もよく看破した一人は、今から百五

松坂

三重縣松阪市。

風靡

本居宣長

國學四大人の一人、伊勢松坂の人。享和元年歿。年七十二。(二三九〇—二四六一)

十年前に、伊勢の國松坂にあつて、天下の學界を風靡した本邦空前の大學者本居宣長であります。その本居宣長の詠んだ有名な歌に、

敷島のやまと心を人間はば朝日ににほふ山ざくら

花

といふのがありますが、この大和心も正しくこの爽やかな心の姿をたゞへたものであります。宣長は全生命を捧げて、この大和心の眞髓を發揮すべく努力した人であります。力を極めて、この日本人のもつてゐる心の本來の姿に存するところの感情の麗しさ、眞心の尊さを説いた人であります。さうして、ひたすらに我が皇室を崇め、我が國家を愛す

ひたすら

る道を力強く主張した人であります。

嫌味

朝日に匂ふ山ざくら花は、如何にも清らかであり、さうして單純にさつぱりした眺であります。嫌味とか毒々しいとかいふところのない、清いみやびやかな姿であります。

そこに私ども日本人としての心の特色が表れてゐるのであります。我々日本人の祖先は、かういふ心持を、明く淨く正しく直き心とも申しまして、道徳の根柢となる心はこゝにあると信じて居つたのであります。

かゝる爽やかな大和心を本質とする神道は、たゞこのみやびやかな心を心として、一途に我が皇室を尊び、我が國家を愛して來たのでありますから、神道の信仰が人性の自然

鎮守の森

簡素

五十鈴川  
三重縣にあり。  
皇大神宮の傍を  
流る。

に存してゐることは明かであります。神社は我が神道を形に生かした表現でありまして、彼の鳥居といひ、鎮守の森といひ、氏神の御社といひ、何れも皆清淨簡素といふことを尊んでゐます。そこにお詣りいたしますと、私たちの心は、自ら清々しい爽やかな氣分になつてしまふのであります。殊に、五十鈴川の清い流のほとりに、二千年の昔から鎮坐まします皇大神宮に詣りますと、何人も古歌に歌はれてゐるやうに、

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに  
涙こぼるゝ

といふ感じに打たれるのであります。この何とはなしに

情操

心ともがな。

感ぜられる尊い心が、即ち日本人の神に對するありのままの姿で、最も氣品の高い宗教的の情操であります。明治天皇の御製の中にも、  
浅みどり澄みわたりたる大空のひろきをおのが心ともがな

といふ御歌がありますが、この氣分をもつてゐることが大切な心がけであります。この御詠を拜誦しますと、いかにも清らかに爽やかな大御心を偲び奉らざるを得ないのであります。

思へば、もう二十餘年の昔になりますが、私は明治天皇に因み奉る一つの挿話をもつて居ります。それは明治天皇

桃山の御陵  
明治天皇の御  
陵。京都市伏見  
區桃山町にあ  
り。

生薑  
シヤウガ。

の御一年祭の行はれた時のことでした。或小さい田舎町の小學校の庭で、町民の遙拜式が行はれました。伏見桃山の方に向つて祭壇を設け、ほどよく隔つた處に並びました老若男女は、その町長を首として、一同桃山の御陵を遙拜したのであります。

その式に列つた町民たちは、何れも靜かに榊葉の立つ祭壇の前に至つて、恭しく遙拜しては立去りましたが、その中に年の頃は五十歳位の八百屋さんがありました。つゝましやかに祭壇の前に立つて、伏拜みましたが、やがて徐に、左の小脇から綺麗に束ねた一束の生薑を取出しまして、丁寧に祭壇に捧げて置いて、一步退いて一禮して立去つたので

目撃

あります。これを目撃しました私は、誠に涙ぐましい感に打たれたのであります。

皆さん、我々日本人の心の底には、かういふ飾り氣のない、單純であつて、しかも清らかな大和心がたゞへられてゐるのであります。私たちは、この心を日々の生活にうつしまして、物を清らかにし、心を爽やかにして、偽らざる力強い社會を築いてゆきたいものであります。私はこの爽やかな心を基礎とした生活を、常に快活にして眞面目なる態度と申して居りますが、日本人の氣分と態度とは、どこまでも快活にして眞面目なところに、一番よく眞價を發揮するものであると信じます。

河野省三  
文學博士。國學者。國學院大學教授。埼玉縣の人。明治十五年

(河野省三)



### 四 千里の春

春晴千里、山また山、水また水、近き水は澄みて山の緑を浮べ、遠き山は霞みて水と共に藍を流す。此の間に一線を引くものは何ぞ。一列の汽車、今や東京より東海道を下りつつあるなり。海に面して窓に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か詩か、抑、畫か。

七砲臺のあたり、波穩かにして、高く低く飛ぶ鷗、落花の風に翻るに似たり。帆を半ば張りて出で行く船あり。艚を操りて横ぎる船あり。房總二州の山々は霞に消えて、探れども見えず。松青き處、色どり添ふるに桃の紅なるを

東海道  
東京より京都に至る街道。

七砲臺  
東京灣内品川沖にありし七個所の砲臺。

房・總  
安房・上總の二國。千葉縣の一部をなす。

山北

神奈川縣足柄上郡川村の大字。東海道本線の驛。

三保の松原  
静岡縣清水市にあり。  
造化  
杳として

熱田の社

熱田神宮。官幣大社。草薙の劍を奉祀す。名古屋市にあり。

草津  
滋賀縣栗太郡にある町。

朝日將軍  
木曾義仲。壽永三年（一八四四）粟津に戦死す。

以てす。藤澤の野、山北の谷、人毎にたゞ美しと叫ぶ。

三保の松原、烟り渡りて、春は畫の如し。磯に碎けて折れ返る波、波路の末に浮立つ雲、何物か造化の妙筆に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆影は動かんとせず。杳として認めらるゝは伊豆なるべし。富士は水彩色もて描かれたるが如く、窓の右に立ち、又左に顯る。

平原十里、見渡す限り、麥は綠に、菜花は黄なり。熱田の社を左に拜みて、春風に吹かれ行けば、名古屋の城は、金の鯨の光に紛はぬ影を見せ初めたり。

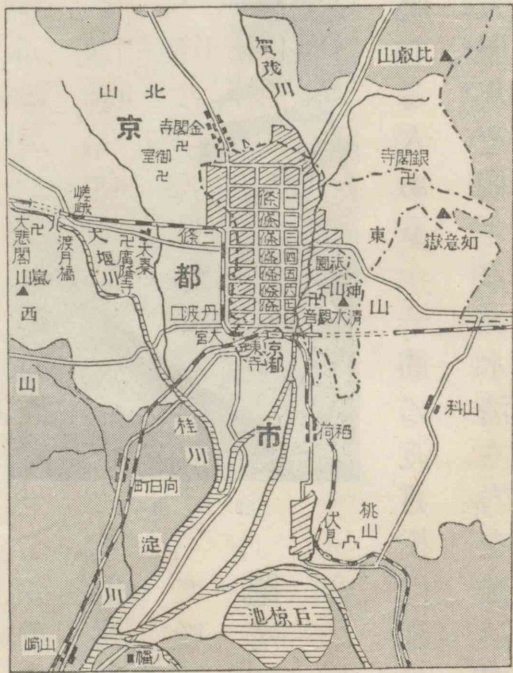
彦根去り、草津來り、烟は早くも瀬田川に横たはりて、京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡も、今は何れの處ぞ。霞に

鳩の浦  
ニホのウラ。琵琶湖をいふ。  
粟津  
大津市膳所町にあり。

山紫に水明か  
山水の景色の美しきをいふ。  
現  
ウツツ。  
躑躅  
ツツジ。  
如意が嶽  
東山の一峰。俗に大文字山といふ。

疊まる、遠近の山影、或は淡く、或は濃く、鳩の浦風波に眠りて、粟津の松原獨り昔に似たり。  
東山の翠は我を迎へて笑ひ、賀茂川の流は我を迎へて歌ふ。懐かしき故郷の母に會ふに似たるは、何時も京都に著きし時の心地なり。  
山紫に水明かなる處、たゞ夢の如く現の如く、三條を渡り四條を渡ること日に幾度ぞ。躑躅を柴に折りそへて、戴き連れたる大原女も、何時しか我が友となれる如し。如意が嶽より吹來る春風は、軽く袖を拂ひ、又、絲長き堤の柳を吹く。類無き晴天は、花の如き少女を誘ひて、西へ東へと群れ行かむ。さし續けたる日傘は、橋の欄干と共に、水に影を落

清水  
キヨミツ。清水寺。眞言宗の寺。京都市東山區にあり。  
蕨餅  
ワラビモチ。  
東寺  
眞言宗の寺。京都市下京區にあり。  
力こそ巧なれ  
御室  
オムロ。仁和寺をいふ。眞言宗の寺。京都市右京區にあり。



せり。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、今日も清水觀音の堂前を満たしぬ。舞臺を廻りて咲誇る花、恰も一幅の畫の如し。姥は此の間に立ちて、蕨餅召せ。など呼ぶ。眺め渡せば、淺黄に藍に霞み渡れる八幡山崎の邊も面白きに、東寺の塔を松の間に墨がきにせる筆の力こそ巧なれ。  
西山の花見る人は、多く先づ御室を指す。松青く樓門赤

香雲

く、茶烟絶えぐに揚りて、花極めて白し。塔は霞を漏れて松風の外に聳え、鐘樓は昔を説きて香雲のうちに包まる。讀經の聲遠く響きて、鶯の歌長へに高き梢にあり。

春こそ今闌なれ



東山の暁

眺むる人あり。一筋の渡月橋は錦の如き袂を載せて、此の大堰川を横ぎる。水清く岩を洗ひて玉と碎け、山白く烟を離れて空にかよふ處、此の美は彼の美と相映じて、自然の

かじよふ  
かじやくに同

大悲閣

千手觀音をまつる。右京區嵐山にあり。

柳櫻を云々

古今和歌集、素性法師の歌に、「見わたせば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける」とあるに

廣隆寺

眞言宗の寺。右京區太秦にあり。

寂寞

大和田建樹

國文學者。高等師範學校・女子高等師範學校教授に歴任す。愛媛縣の人。明治四十四年歿。年五十四。

彩色を成す。坂を登りて大悲閣に至れば、眼下に廣げらるる一幅の圖、柳櫻をこきまぜて、恰も錦を織出だせる如く、又、友禪を染め成せる如し。途に太秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽靜かに鐘樓の瓦を染めて、春物寂し。茶店あれども客來らず。少女は落花を風に任せて眠り、兒童は仁王門に紙礫を打附けて去る。暮色は東山を籠め、叡山を繞り、漸く賀茂川に襲ひ來れり。清水の塔も半ば隠れぬ。紫に紅に藍に墨に見るく、彩られ行く山影、薄く濃く青く黒く消され行く人影、詩中の物ならぬは無し。天地たゞ平和にして、四望たゞ寂寞たり。顧みれば西山も無く、北山も有らず。

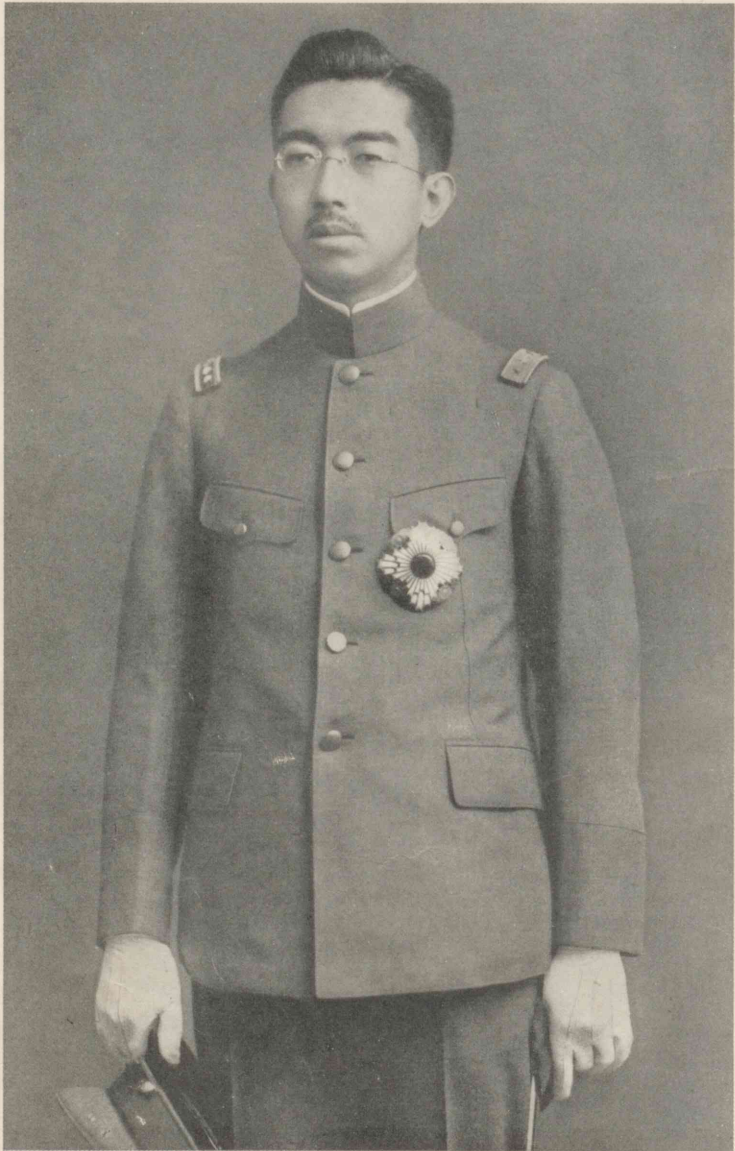
(大和田建樹「雪月花」)

ロンドン  
英國の首府。  
東宮殿下  
今上天皇。  
五月十一日  
大正十年。  
バッキンガム王  
宮  
英國首都ロンド  
ンにあり。皇帝  
御在位の王宮。  
英國皇太子  
ジョージ五世の  
第一王子。  
鹵簿。  
閑院宮  
載仁親王。元帥  
陸軍大將。  
ギルドホール  
公會堂の名。  
堵列

### 五 ロンドンに於ける東宮殿下

五月十一日午前十一時、我が東宮殿下にはバッキンガム王宮御出門、陸軍御正装で、英國皇太子殿下と御同乗、公式鹵簿を以て、ロンドン市役所の歓迎會に台臨になつた。閑院宮殿下を初め、供奉員一同も隨伴した。王宮から會場であるギルドホールに至る里餘の間、市民が沿道に堵列して御歓迎申上げる有様は、御入京の時に比して更に熱烈を加へ、殿下は全く御答禮にお違がないほどであつた。

抑この市役所の歓迎會ぐらゐ、在留邦人及び供奉員の心に深刻強烈な緊張を與へたものは、御外遊中他にその例が



天 壤 無 窮

環視  
クワンシ。とり  
まきてみるこ  
と。

遂行  
スキカウ。



宮王ムガンキツバ

なかつた。それは實にこの日こそ、我が東宮殿下が初めて

英國國民環視の中心になら  
せられることであり、また殿  
下としては、御生涯の中に始  
めて一千名に近い外國知名  
の人の面前で、御歓迎の辭を  
お受けになるからである。  
一在留邦人は、その前日、我々  
に向つて、東宮殿下はギルド  
ホールで十分その御大任を  
御遂行になつて下さればよ

五

ロンドンに於ける東宮殿下

九重の雲晴の場所

いが……と、頗る心配氣に話した。この言葉は殿下に對してまことに失禮のやうではあるが、しかし、我々の敬愛して措かない東宮殿下が、しかも九重の雲の奥深く生ひ立ち給ひ、御年漸く二十一歳に渡らせられる殿下が、今まで全く御經驗のない晴の場所であるこのギルドホールにお立ちになる前に、誰がその御演説について、將又その御態度について、憂慮なしに考へることが出來よう。畏れ多いことではあるが、假に殿下の御音聲が低くてホール全體に通らなかつたとしたら、假にその御態度がいつになく御落著がなかつたとしたら、假にお聲が顫へたとしたら、……我々お側近く奉仕するものは、そんなことは到底ないとは信じてゐる

顫ふ  
フルぶ。

政策的

自他の觀念古色を帯ぶ

ものの、それでも多少の興奮を禁じ得なかつたのである。まして、殿下の御性格を十分に知らず、またお親しみ申上げる機會の甚だ少かつたこの一在留邦人が心配したところは、恐らく日本國民一般の憂慮であつたに相違なからう。しかも、これは何も國際的又は政策的に考へて、殿下の御態度を心配するのではなく、たと自國の殿下がどうか御立派にやつて下さればよいが……といふ、自他の觀念を超越した心の奥から込上げて來る自然の叫びであつたのである。當日の歡迎會は、最も改まつた公式のものであつた。古色を帯びた公會堂のうちには、隙間もなく來會者が著席してゐた。殿下が御入室になると、君が代が奏せられ、會衆は



下殿宮東るけ於にルーホドルギ

連綿  
長くつらなりて  
絶えざること。  
頁  
ページ。

一齊に起立して殿下を奉迎した。  
殿下は市長の御案内で、供奉員一同を随へさせられ、會衆の間を静々と御通過になり、數段高い演壇上に設けられてある御席にお著きになつた。市長夫妻その他吏員の大禮服の古風な服装は、連綿たる歴史の頁を貫いて今日に至つたものであるとい

憧れ  
アコガれ。

貴賓

嚴然

ふ。それは我々に羨しいほどの憧れを感じさせた。御席は演壇上の前端に一つ離れて設けられ、その後には市長夫妻の椅子があり、更にその後には英國側の皇族、貴賓の席と日本側の高官及び供奉員の席とが設けられてあつた。  
お伴の者が、殿下に續いて所定の座席に著くと、會衆は漸く腰を下した。さすがに大國民である。私語する者もなく、齊しく靜肅に殿下をお見上げ申してゐた。我々は實に一種形容することの出來ない崇高さを覺えた。  
殿下は、たゞお一人、孤立した御席に、頗る御沈著な御態度で、嚴然と椅子にお倚りになつてゐた。この時、我々は何とも言へぬ嬉しさを感じた。「お、お立派な御態度だ」と、感歎

英姿

するとともに、我に歸つて在留邦人の會衆の一團を見ると、皆緊張した氣分を漲らせて、殿下の御英姿をお見上げ申してゐた。

朗讀  
ラウドク。

やがて市長は、恭しく殿下の御前に進んで、歡迎文を朗讀した。次いで、殿下はお起ちになつて、演壇の前端までお進み遊ばされ、徐に會衆一同にお目をお配りになり、軽いお會釋の後、まづ前立のある陸軍御正帽を左脇下にお挟み遊ばされ、陸軍正規の鹿革の厚い御手袋を左手にお穿ちになつたまゝ、御答辭の草稿の巻紙をお開きになつた。處が、用紙が厚い爲に、それをお開きになると、二回までも紙の撚が元に戻つて、甚しく御面倒のやうに拜せられた。我々はこれ

撚  
ヨリ。

會釋  
エシヤク。

胸を轟かす

を拜して、脇下に御帽子をお挟み遊ばされてゐるだけに、さぞお扱ひにくいことであらうと、胸を轟かせながらお見上げ申してゐたが、殿下は益、お落著になり、二回三回とよくその紙をお引延べ遊ばして、音吐朗々と、しかも諧調のある抑揚を以て御演説遊ばされた。その間、滿場は眞に水を打つたやうな靜肅さで、會衆は殿下の響き渡るお聲を酔ふやうに伺つてゐた。御演説が濟むと、會衆は一齊に拍手して、暫しは鳴りもやまなかつた。あゝ、この時の印象は、眞に一生涯忘れることが出來ないであらう。これを感激と名づけるのさへあまりに限定的に、あまりに説明的になる虞がある。たゞ云ひ知れぬ涙が、知らず／＼泉のやうに眼底に涌

音吐朗々  
諧調

虞  
オソレ。



覺えた

くのを覺えた。會衆の日本人の群を見返ると、皆喜悅の笑

顔といふよりは、寧ろ感謝の念に包まれたといふやうな顔附をしてゐた。

我々は後で、あの那須與一宗高が、屋島の戦で、敵の舷頭に掲げてある日の丸の扇を射るために、靜々と馬を波間に乗入れ、矢を番へて將に放たうとしたその刹那の味方の心持、さては首尾よく扇の要を射貫いた時の味方の心持は、この際我が

那須與一宗高  
源義經の臣。

屋島の戦

壽永四年（一八四五）二月屋島（香川縣）に於ける源平兩軍の合戦。

番へる  
ツガへる。

刹那



下殿宮東の中策散御外郊ンドンロ

東宮殿下が御答辭案をお手にして、お起ちになつてから、御演説をお終へになるまでの我々日本人の心持と丁度同じであつたらうと、畏れ多いことながら、ふと感じたのであつた。

（二荒芳徳―皇太子殿下御外遊記）

二荒芳徳  
伯爵。貴族院議員。明治十九年生。御外遊に宮内書記官として供奉せり。

今上陛下御製

山色新

山々の色はあらたにみゆれども我がまつりごと  
いかにあらむ

朝海

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波立  
たぬ世を

皇太子殿下  
繼宮明仁親王。

瑞雲

霰く

タナビク。

津々浦々

辻博士

文學博士辻善之助。

有馬大將

海軍大將有馬良輔。

大給子爵

大給近孝。

松浦子爵

松浦靖。

細川子爵

細川立興。

### 六 皇太子殿下御浴湯の儀に奉仕して

昭和八年の十二月二十三日の拂曉瑞雲空に霰き旭光地に輝いて、我が九千萬同胞の待ちに待ちたる皇太子殿下は御降誕あらせられました。宮中は勿論國民歡喜の聲は、津浦々にまで充ちわたりました。かくてその二十九日、即ち七日目に、御命名の儀が舉行せられ、更に御浴湯の儀に讀書鳴弦の式が行はせらるゝので、辱くも私は讀書の本役を仰付けられ、辻博士がその控に任せられ、鳴弦の方では有馬大將と大給子爵とが本役、松浦子爵と細川子爵とが控として奉仕することになりました。

肅々

皇子御養育掛  
小倉満子。



皇太子殿下

かくて當日の午前八時に、我々奉仕の面々は、一同宮中に參殿し、別室にて衣冠單の装束に著け更へ、やがて十時近くになりますと、奉仕の諸員は肅々と順に進んで、御浴殿の側の廊下に整列しました。すると皇太子殿下には、皇子御養育掛が御抱き申上げ、幾多の供奉の人々を従へられて、浴殿へ御入になります。同時に我々は、更に進んで、浴殿の對面の廊下に參列しました。浴殿の正面には白き

幔幕が垂れて居り、その前の一間は讀書鳴弦の式場であります。やがて合圖により、私は笏と卷物とを持ち、先づ進みて式場の中央に立ちますと、鳴弦の本役たる有馬大將と大給子爵とは、その後、少しく離れて、弓を持ちながら左右に分れて並び立ちました。控の方々はやはり廊下に立つて居ります。時に廣幡皇后宮大夫と岡本事務官とは、その室の左隅に立つて居りました。やがて私は笏を懷にして、卷物を開きますと、鳴弦の本役たる有馬大將は、極めて低音にて祈禱の詞を述べます。それが終ると、直ちに私は卷物の文を讀上げました。讀み了ると、鳴弦の本役は、左足を進め、引きしぼつた弓弦をひようとばかりに放つて「オー」と呼ぶ。

廣幡皇后宮大夫  
侯爵廣幡忠隆

岡本事務官  
皇后宮事務官岡  
本愛祐

嫋々  
デウデウ。音の  
長くひびくさ  
ま。

弦聲は餘音嫋々として殿内に響きます。その消えやらぬ響の中に、私は重ねて卷物を讀み返しますと、同様に鳴弦も繰返されます。これが内親王の時は二回であります。王の時には三回でありますので、我々は三度これを繰返しました。その間に御浴湯の儀は済ませられて、御退殿になります。我々奉仕の諸員は元の處に退いて、奉送すること、奉迎の時と同じでありました。この間僅かに二十分に過ぎませんが、極めて嚴肅



市村瓊次郎

靄然  
アイゼン。

天顔

莊重なる中に、靄然たる和氣の漂へるを感じました。而して、式後我々は、内謁見所に於て、天皇陛下に拜謁仰付けられ、特に天顔の麗しきを拜しました。次いで侍従長の手を経て、兩陛下より賜物あり、且別室にて酒饌を戴いて退出したのであります。

紫式部日記  
紫式部が宮仕中の事どもを記したるもの。

寛弘五年  
一條天皇の御代。(一六六八)

親王及び内親王の御降誕の時に於ける御浴湯の儀は、極めて古い時代より行はれたやうに存ぜられますが、その平安朝時代の儀に就きては、紫式部日記に當時の有様が詳細に記されてあります。それは寛弘五年九月に、後一條天皇の御降誕遊ばされた時の事であります。その記事に據ると、御誕生の時より七日間、御浴湯の際に讀書鳴弦の儀が行

孝經

儒教經典の一。孝道に就て録す。作者未詳。

史記

黃帝より漢の武帝までのことを記せる紀傳體の歴史。司馬遷の著。

古禮

秩父宮

雍仁親王。大正天皇第二皇子。明治三十五年六月二十五日御誕生。

はれたのであります。讀書即ち文讀む博士は、一人に限らず、數人にて代るゝ奉仕し、或は孝經を讀み或は史記などを讀みました。鳴弦は、つるうちと稱し、その奉仕の人員は二十人にて、二行に列び立ちて弦を鳴らすのであります。明治の時代になりますと、宮中の種々の儀式を改定せられました。御浴湯の儀も、古禮を參酌して制定せられ、この復興せられたる御儀が、秩父宮殿下御誕生の時に初めて施行せられたやうに承つてをります。この儀式は、御誕生後七日目の御命名の儀の當日に行はせらるゝので、讀書には本役一人控一人、鳴弦には本役二人控二人の定であります。さて、鳴弦は悪魔不祥を攘はるゝ意味もありますが、弓矢

世子  
桑弧蓬矢云々  
禮記にあり。

日本書紀  
神代より持統天  
皇に至る漢文の  
編年體の歴史。  
養老四年撰進。

は男子の執るべきもので、武の意味を寓して居るやうに思はれ、支那の上代に於ても國君の世子が生れた時には、桑弧蓬矢を以て天地四方を射るといふことが見えて居ります。讀書の儀は支那には行はれず、日本のみに行はれたやうでありますが、これは文の意味が寓せられて居るのではないかと思はれます。故に讀書鳴弦の儀は、文武並び備はらんことを期待する意味が含まれて居るのであらうかと思はれます。されば今回奉讀の書に就きては、特に日本書紀卷五崇神天皇紀の十年の處を選んだ次第であります。その内容は、諸の公卿に詔して、教化を重んじ神祇を禮すること、を告げ、使を遠國へ遣してその趣意を知らしめたこ

四道將軍  
崇神天皇十年九  
月、大彥命を北  
陸に、武渟川別  
を東海に、吉備  
津彦を西道に、  
丹波道主命を丹  
波に遣す。

市村瓚次郎  
文學博士。東京  
帝國大學名譽教  
授。國學院大學  
學長。帝國學士  
院會員。茨城縣  
の生。元治元年  
生。

と、及び四道將軍に命じて、その教を受けざるものがあつたならば、これを征伐せよとの詔であります。即ち文に偏せず又武に偏せざることが分りませう。今やこの非常時に際し、慶賀すべき皇太子殿下の御降誕に臨み、御浴湯の儀にこの一章を讀上げることが得ましたのは、まことに一生の光榮で、深き感激の情に堪へません。但、紫式部のごとき才筆を持ちませんのが遺憾の極みであります。

(市村瓚次郎)

ほがらく／＼豊さか登る朝日子の光の中に皇子生れましつ  
よろこびの心きはまりよろこびの涙はあふる大御民われ

### 七 皇軍の精神

御稜威

大捷

タイセフ。

日本海海戦

明治三十八年

(二五六五)五月

二十七日より翌

二十八日にわた

る日本海沖の島

附近より鬱陵島

附近に互りて行

はれし日露大海

戦。

歴々

戦うて

戦ひて



東郷元帥

大元帥陛下の御稜威と、將卒の忠勇と、國を舉りての愛國心とに由り、海戦史上空前の大捷を得たる日本海海戦も、すでに三十年の昔となりましたが、追憶すると、當年激戦の状、歴々として今なほ目前に見る心地が致します。この戦役に於て、露國軍人の態度を觀るに、弱いどころか、寧ろ強兵と云ひ得る程でありました。然るに皇軍と戦うて連敗したのは、どういふ理由からであつたで

せう。

惟ふに彼等の多數は、戦争なるものを、軍隊若しくは軍艦としての任務だと信じて居るもののやうであります。随つて勝敗を決することも、軍隊若しくは軍艦の存在を限度とし、これが敗れた場合には、最早軍人としての自己の任務は終つたものと思惟し、例外はありませうが、其の上の個人的奮闘を續ける精神が少いやうであります。これが皇軍に敵し得なかつた大原因だと私は考へて居ります。處で改めて言ふまでもありませんが、皇國軍人にありましては、一隊一艦としてのみでなく、假令一兵となつても、苟も一人たりとも生存してをる間は、敢然として盡忠の大義に殉じ、

思惟  
シキ。

假令

タトヒ。

敢然

カンゼン。

大義に殉ず

完うする  
完くする

以て本分を完うしようとする覺悟は鐵石よりも堅いのであります。

殊に忘れられないのは、此の海戦に於て生命を君國に捧げた戦友のことで、皇軍を無窮に守護しつゝある其等の英靈は、勿論今も嚴として、我々の行動を監視して居らるゝであります。

扱、私共が本分を盡す上に於ては、平時と戦時との區別はございませぬ。輕重もございませぬ。何時如何なる場合に於ても、唯々至誠を以て一貫すべきのみで、他を顧みる必要は更にあるまいと思ひます。斯くて我が軍艦旗をして、益、光輝を放たしむると同時に、世界平和の保障たらしめて

保障

ホシヤウ。

ございませぬ  
ござりませぬ

顔

カンバセ。

夷らかよせくる  
船をしつめても  
みいつをあけよ  
皇國人 平八郎

澎湃

ハウハイ。波の  
さかまくさま。

東郷平八郎

元帥海軍大將。  
侯爵。鹿兒島縣  
の人。昭和九年  
歿。年八十八。

こそ、此の海戦に、或は生命を捧げ、或は傷ついた僚友たちに、始めて向ける顔があると思ひます。それと共に今一つ忘れてならぬことは、當時國民諸君が、義勇奉公の大精神を活躍して、燃えるが如き熱誠を示された一事でありまして、出



東郷元帥筆

征して居た當時は勿論、今より回顧しましても、眞に心強い感が涌き起ります。私は此の大精神は、澎湃として永久に漲り、以て御國の守護たるべきものと確信致します。

(東郷平八郎—愛國讀本による)

八落椿

落合直文

號は萩の舎。國文學者。歌人。宮城縣の人。明治三十六年歿。年四十三。

わ木

落合直文

山寺の石のきざはしおりくれば椿こぼれぬみぎにひだりに

父君よ今日はいかにと手をつきて問ふ子を見れば死なれざりけり

正岡子規

名は常規。俳人。歌人。愛媛縣の人。明治三十五年歿。年三十六。

正岡子規

くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の針やはらかに春の雨ふる

瓶にさす藤の花ぶさみじかければ壘のうへにとゞかさざりけり

わがやどの山吹さきて向つ家の一重ざくらは葉となりにけり

伊藤左千夫

名は幸次郎。歌人。千葉縣の人。大正二年歿。年五十。

伊藤左千夫

しばらくを三間うちぬきて夜ごとく子らがあそぶに家わきかへる

波は云々  
明治三十三年、東京地方の洪水。

波は壘の上へのぼりぬ。人も牛もにがしやりて、水の中に獨り夜を守る庵の寂しさに、こほろぎの音を聞きてよめる歌。

牀のうへ水こえたれば夜もすがら屋根の裏べにこほろぎの鳴く  
さ夜ふけて訪ひよる人の水音に軒のこほろぎ聲なきやみぬ



### 九 朝の鳥

湖水  
琵琶湖をさす。

寢床を出て、楊枝をつかひながら、湖水の見える部屋に往つて見る。

雲海  
ウツカイ。

東谷・北谷  
比叡山延暦寺内  
の一部の稱。

朝日が部屋一面にはひつて居る。湖水と思はれる邊は、雲ばかりでなにも見えぬ。富士の頂上から雲海を見おろしたのと似た景色だ。部屋の下は東谷になつて居るので、我が眼より、稍高く、稍低く、無数の杉の梢が、鉾のやうに突つ立つてゐる。左手には、北谷の向うに當る峰が、鋸の齒のやうな杉を背にならべて、湖の方に流れてゐる。空氣が清い上にも清いので、近景の杉の梢も、遠景の杉の森も、新鮮な色

をしてゐる。さうして、その間を、薄い霞が流れてゐる。非

浮世

常に静かだ。自分の呼吸の外、浮世の

わが物顔

物音は何も聞えぬ。



比叡山よ見りたる琵琶湖

たゞ此の天地をわが物顔に啼き囀つてゐるのは小鳥だ。何といふ可愛い聲であらう。名がわからないのが残念だ。その杉の梢で、一羽啼いてゐる。あその杉の梢で、他の一羽が答へてゐる。また遙か向うの谷深く、他の一羽が應じてゐる。よく耳を澄ますと、なほ二三羽の聲がどこかで聞えるやうだ。また其

凜々しい  
リリしい。

空山

殖える

錯綜

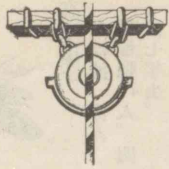
けたましい



山鳥  
鶉類に屬す。

の小鳥の合奏を破るやうに、他の聲の小鳥が、突然その間に高音を張る。前の小鳥ほど優しい聲ではないが、又凜々しいところがあつて、其の音の空山に響く趣が何とも云へぬ。これも名のわからぬのが残念だ。それも一羽ではない。三羽・四羽と聞くうちに、だん／＼殖えてくる。前の小鳥が縦糸なら、此の小鳥は横糸のやうに、互に錯綜して、能く調和を保つところが面白い。突然、けん／＼とけたましい音が谷を横ぎる。此方の谷にも響けば、彼方の峰にも響く。昨日聞いた雉子の聲よりも稍急調だ。多分山鳥でもあらうか。前の二つの小鳥で織り成した美しい絹を、たゞ一聲で引裂いたかと疑はれる。

鰐口



啄木鳥  
キツキ。攀木  
類に屬する鳥。



暫くして、その聲は谷の底の底、峰の奥の奥に浸みこんでしまつて、そのあとは元の静けさになる。眞先にその静けさを破るものは鶯の聲だ。絹におかれた緋のやうに美しい。一つの緋が置かれると、又縦糸を織つて、前の小鳥が啼く。又横糸を織つて、次の小鳥が啼く。緋が啼く。縦糸が啼く。横糸が啼く。此の美しい絹を、又山鳥の聲が破るのかと思ひながら、待設けて居ると、不思議な聲が別に起る。それは麓の里の池で聴く蛙の聲に能く似て、谷の寺院の鰐口が口をあけて、呟くのかとも疑はれる。他の鳥の聲が皆高調で、晴れ／＼とした中に、ひとり低調で、不平らしい音を出すのが面白い。友は、啄木鳥だらう。といひ、他の者



山鳩  
高濱虚子  
名は清。伊人。  
愛媛縣の人。明  
治七年生。

は「山鳩だらう。」と云つた。  
琵琶湖の上には、まだ漠々とした白雲が漂うてゐる。杉  
の梢を流れる霞は、少しづつ薄らいで来て、だんくと谷が  
深く見えて来る。  
(高濱虚子—新寫生文)

父母のしきりに戀し雉子の聲  
風呂敷へ落ちよ包まむ舞雲雀  
鶯の日枝をうしろに高音かな  
古き戸に影うつりゆく燕かな  
虹の根に雉子鳴く雨の晴間かな  
芭蕉  
惟然  
燕村  
召波  
几董

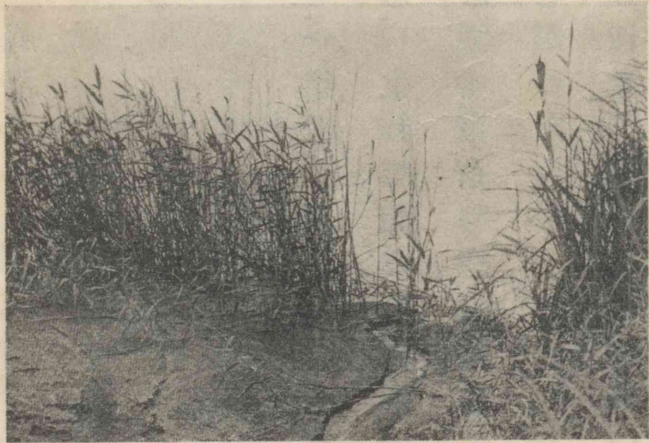
一〇母と蘆

片岡

故郷の母をおもへば  
片岡の蘆もなつかし。

さやくと風の渡れば、  
靡き寄るゆふべの穗波、  
わが母の眉を偲ばせ、

しめやかに  
しめやかに雨ふる夜半は、  
そことなき葉ずれの響、  
わが母の聲音にまがふ。



蘆

故郷の母をおもへば、  
かの青き蘆もなつかし。

少年時代に、私は東京を離れて、一年ばかり奈良の古都に  
近い田舎で暮らしたことがある。生れて始めて両親の傍  
を離れたので、私は明けても暮れても、東京の空を眺めては、  
あの明るい銀座の街の灯を戀しがつた。

私のゐた家の裏手は小高い丘になつて、そこには青い蘆  
が一面に生え茂つてゐた。私の室の窓の障子を開けると、  
すぐ眼の前にそれが見えた。晝間は丘の上にコバルト色  
生え茂つて  
コバルト色  
紺青色。

葦切  
ヨシキリ。行行  
子とも書く。燕  
雀類に屬す。



戦ぐ  
ソヨグ。  
蘆の穂波

の空が覗いてゐた。をり／＼白い雲が流れた。蘆の中で  
は、葦切が玉を切るやうな音を立てた。夕暮には、何處から  
ともなく、次第に黒く煙のやうに迫る暮色の中を、冷たい夕  
風がさや／＼と渡つて来て、蘆の細い葉を揺がせた。私が  
一番好きなのは、この夕風に戦ぐ蘆の葉を見てゐることだ  
であつた。あちらに黒く、こちらに白く、風に靡いて光りかけ  
る蘆の穂波を見てゐると、それがいろ／＼に、人の眉鼻口な  
どを描くやうであつた。殊にそれが優しい顔附に見えた  
ので、私は懐かしい母の顔を思ひ出した。私はちつと眼を  
つぶつて、その蘆の生えた丘の面いつばいの巨きな白い母  
の顔を想ひ浮べた。さうして、うすら冷たい風の中でひと

嫩草山  
ワカクサヤマ。  
奈良市の東方に  
ある小山。

り「お母さん」と懐かしく涙ぐましく叫ぶのであつた。  
その時分、私は每晚一里の路を歩いて、奈良の町まで英語  
を習ひに行つた。嫩草山の麓に、キンポールといふアメリ  
カ人のお婆さんが住んでゐた。もう七十に近い年で、年中  
眞黒い服を着て、赤く爛れた兎のやうな眼に、大きな眼鏡を  
掛けてゐた。その人に、夕方の六時から七時まで、英語の讀  
み方と發音を教はり、それから温かいおいしい紅茶を御馳  
走されて歸つて來る時分には、もう田圃の中の道には、とつ  
ぷり日が暮れてゐて、蛙の聲だけが諸方に寂しく聞えるの  
であつた。

かうして獨り丘の徑を下りて來る時に、兩側の蘆の葉の

囁く  
ササヤク。

さら／＼と戦ぐ音は、恰も彼等が内證で何か囁きあつてゐ  
るやうであつた。時には多數の人がその葉蔭に集つて、何  
かひそ／＼話してゐるのではないかと思はれることがあ  
つた。さうして、その聲の中に、殊更聞き覚えのある懐かし  
い母の聲が聴き取れたやうに思へた。

しめやかに小雨の降つてゐる夜などには、取分けさうし  
た感じが深かつた。室へ戻つて、戸を締めて床に就いてか  
らも、優しく諄々と諭すやうな母の聲音が、いつまでもしみ  
じみと耳元に響いてゐるのであつた。

その頃の母戀しさの心を、私は「母と蘆」といふ題でこゝに  
歌つたのである。

(西條八十海邊の墓)

西條八十  
詩人。早稻田大  
學教授。東京の  
人。明治二十五  
年生。

### 一一 水郷夏趣

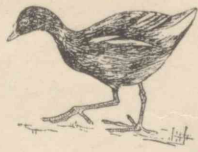
水郷の夏、眞菰の茂りに小舟を乗り入れると、水鳥がぱつと飛び立つ。ばんごゝるさぎくひな、かいつぶりよしきりの類。

眞菰の根方、水とすれくゝの處に、孟蘭盆の精靈棚のやうに草を編み合はせた鳥の巢が、彼方にも此方にも浮いてゐる。これが水の増減に任せて、自ら高くもなれば、低くもなる。巢の上には程よく草の葉がかぶさつて、一寸鳥の巢とは見えぬが、此の草の葉を取除けると、其の下に小さな卵が十箇許り列んでゐる。水鳥の卵だけに、卵が水につかつて

眞菰

禾本科に屬する多年生草本。

ばんごゝるさぎくひな、かいつぶりよしきりの類。



ごゝるさぎ五位鶯。涉禽類に屬す。



くひな水鶏。涉禽類に屬す。



かいつぶり鴨。游禽類に屬す。



孟蘭盆  
ウラボン。七月十五日の佛事をいふ。普通省略して、單にボンと稱す。  
精靈棚  
シヤウリヤウダナ。

ある。かいつぶりとよしきりとのだと、人が教へてくれた。眞夜中にふと目を覺すと、静寂のうち鎖された天地の中に、星屑の瞬く外は、この世に生動してゐるものの、何一つあるとも覺えぬところに、ひゆらひゆらひゆらと、細い悲しげな聲で、かいつぶりの鳴く聲が水の上から傳はる。遠く近く、東に西に、何處を何處とも定めなく鳴く音の聞えるのは、人影一つ見えぬ湖の闇に、此の世を我が世とばかり飛びかはしてゐるものと見える。



水郷 石山太柏筆

かいつぶりの鳴く聲を聞くのは闇がよい。  
 かいつぶりの聲が闇によくば、よしきりの聲を聴くのは、  
 月明の夜がふさはしい。晝間は少しうるさいが、夜、月明に  
 湖水の水が庭の松が枝をくゞつて見ゆる時、静かによしき  
 りの聲を聴いてをれば、如何にも心のびやかなるを覚え  
 る。これが卵を生み、雛を孵すやうになると、はたと鳴<sup>なり</sup>を静  
 めて、何處にゐるか分らなくなる。

シェレー  
 英國の詩人。(一  
 七九二—一八二  
 二)  
 スカイラーク  
 雲雀。

シェレーが雲雀の鳴く音に擬したスカイラークの詩を  
 學んで、よしきりの鳴く音を歌つて見ると、まづかうもあら  
 うか。

行行子<sup>ぎやうぎやうし</sup>がなく

行行子が鳴いてるとやうに

行行子がぎようぎようとなく

日すがら夜すがら

水近き眞菰の中

そよ風になびく蘆の葉かげに

行行子がぎようぎようとなく

ぎやぎやぎやぎやあ

ぎやぎやぎやぎやあ

夏が至る毎に、湖面に名も知れぬくさぐさの草が花を開  
 く。布袋葵の紫や、河骨の黄など、色とりどりの花が咲く。  
 野生の睡蓮が、黄がかつた白い花をつける。花は小さいが、

布袋葵  
 ホテイアフヒ。  
 みづあふひ科に  
 屬する一年生草  
 本。  
 河骨  
 カウホネ。睡蓮  
 科に屬する多年  
 生草本。  
 睡蓮  
 睡蓮科に屬する  
 多年生草本。



野趣

蓴菜  
ジュンサイ。睡蓮科に屬する多年生草本。



たどくと

野生だけに一種の野趣が溢れて愛すべきである。見たこととはないが、蓴菜も沼の何處やらに花が咲いてるさうな。水底に生ふる藻が夏は茂つて、水の中を見下すと、澄み切つた水の底一面がさながらの叢となつてゐる。草の冬枯れて夏茂るのは知つてゐるが、水底の藻も冬は枯れて夏茂ることを永い間知らなかつた。この藻屑が肥料になると、朝靄の晴れやらぬ頃から、小舟に棹さして、これを引揚げてゐる人の姿も、夏の趣を見せる。

夏の朝、何處を指して何處に行くといふこともなく、小舟を乗りまはす。蘆をわけ、眞菰を開き、藻の花に乗り、河骨の上に浮ぶ。夏の夕べ、夕闇の迫る岸の細道をたどくと行けば、人もなげに螢がすれすれに飛びかひ、遠くとのみ聞きなした梟が、ほろくとつい頭の上で鳴く。折ふし野らから歸る頬被り姿の可笑しいのが、すれちがひさま道を讓つて、挨拶して行き過ぎるのも親しげで嬉しい。

(杉村楚人冠—續湖畔吟)

杉村楚人冠  
名は廣太郎。東京朝日新聞記者。和歌山市の人。明治五年生。

山の鳥いまだ聲せずしのゝめの此の湖ぞひに吾が一人なる  
山村の人すなほなり遇ひて語るどの人もどの人も皆よき人ぞ



クリミヤ  
クリミヤ半島の  
こと。歐羅巴の  
東南、黒海に突  
出する半島。

### 二一 クリミヤの天使

一八五三年、露土兩國間の國交が斷絶するや、英佛二國は、トルコを助けてロシヤと戦つた。いはゆるクリミヤ戦争は即ちこれである。

アルマ  
クリミヤ半島を  
流れて黒海に注  
ぐ河。  
インケルマン  
クリミヤ半島の  
セウアストポー  
ル附近にある村  
名。  
捷報  
セフハウ。  
蹂躪  
ジウリン。ふみ  
にじること。  
塵風

英佛聯合軍は、幸にしてアルマやインケルマンの戦に勝つた。捷報は英國民の士氣を壯んにした。全國民は奮ひ立つた。然るに、間もなく悲惨な報告が傳へられた。それは、恐るべき疾病が忠勇なる軍隊を蹂躪しつゝあるといふことであつた。時方ときに炎暑の候、酷熱の塵風とともにコレラの病魔は英佛軍を襲うて、將校兵卒の斃死するものが相

襲うて  
襲ひて

酸鼻  
サンビ。

驚駭

キヤウガイ。

戦慄

センリツ。をの  
のきおそれるこ  
と。

醸金

キヨキン。



像銅ルーゲンテイナ

繼いで、忽ち死の山を築いた。一方疾病のために戦ふことの出来ないものが、一萬數千人の多きを算するに至つたが、しかも病兵は、病院の不足、看護の不行届のために、非常な悲惨を嘗めてゐるのだつた。

この酸鼻すべき報告は、全英國民をして驚駭戦慄させた。その子、その親、その兄弟、その夫を戦場に送つてゐるもの

は、何れも痛心憂慮した。そして慈善心と公共心とに富む國民は、これが救済のために醸金した。けれども、この場合、金よりも一層必要なものは、是等傷病兵看護のためにクリ

ナイチンゲール  
英國の慈善家。  
(一八二〇—  
九二)

ミヤに往くべき人だつた。

この時、かゝる慘狀を耳にしたナイチンゲールの心は、どう動いたらう。人形の片腕が折れた時でさへ涙を止め得なかつた彼女は、果してどう感じたらう。折しも彼女は聊か健康を害してゐたので、郷里に退いて、栗鼠の囁く木蔭や、小鳥の歌ふ森の間に日を送つてゐたが、到底クリミヤの慘狀を坐視するに忍びず、今こそ自分の起つべき時である、君國のために盡すべき時である、これ神の命令であると自覺して、早速陸軍卿に請願書を送つて、自ら看護婦隊を組織して戦地に赴きたいと出願した。所が、不思議にもこれと入違ひに、陸軍卿からも彼女に向つて、傷病兵看護の大任につ

坐視

請願書

懇書  
コンシヨ。

いて一考を煩はしたいとの懇書が送られたのだつた。そこで彼女は、これ正に疑もなく自分の使命であるとの自信を堅くした。

陸軍卿は、直ちに彼女の請願を許し、その行動に關する全權を承認した。彼女は、百方奔走の結果、遂に三十八名を以て編成した看護婦隊を引率し、同年秋十月下旬、英國を出發した。この行に關する英國の輿論は區々で、中には、かゝる重大な看護の任務を、かよわい婦女子に委せるのは輕舉である、と非難するものもあつた。これは當時の言論としては寧ろ當然だつた。

慈愛と正義と熱情に燃える彼女の一行は、十一月初旬ク

輿論  
ヨロン。  
かよわい

寂寞  
セキバク。

リミヤ半島に到着した。不潔と亂雜と惡臭とに満たされて  
みた野戰病院は、清潔にされ、整頓され、寂寞と苦痛に哭い  
てみた可憐な傷病兵は、宛ら天使の訪れに遭うたやうに感  
泣した。病勢が重くて所詮死を免れることの出来ないも  
のも、尊い信仰の下に心の平和を得て瞑目した。

曩に  
サキに。

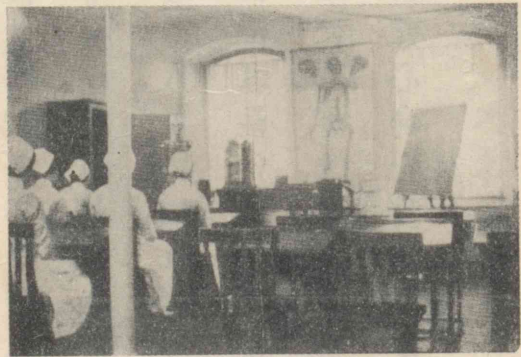
かくて兵士達の家郷に送つた書簡や、從軍記者の發した  
通信は、全英國民を擧げて彼女を歎美させ、曩に非難した人  
人までも、悉くその偉勳を賞揚して、我もくと義金を醸出  
した。五百萬圓の巨額は、忽ち彼女の事業費に充てるべく  
送られた。しかし、彼女は少しもそれを自分の功績とは思  
はなかつた。たゞ自分の使命を遂行してゐるのに過ぎな

周到

いと考へてみた。そして、この金を以て、更に完備した病院  
を建てて、傷病兵の看護慰安を周到にすることに努めた。

憂慮  
イウリヨ。

かゝる激烈な勤務の中に、彼女は  
幾度か病魔に襲はれたので、人々は  
これを憂慮して、頻りに歸國を勧め  
たけれども、彼女はもとより神に捧  
げた體、こゝで死ぬのも神の御旨で  
ある。といつて、一向これに應じな  
かつた。



室一の院病スマト-トンセ

媾和  
コウワ。

一八五六年、幸にも英・佛・土・露・奥・普の使臣の會議によつて  
媾和が成立した。遠征軍は、歡喜の情に溢れながら凱旋の

厭うた

ヴィクトリア女  
皇

英國の女皇。(一  
八一九—一九〇

象徴  
シヤウチヨウ。

途に上つた。彼女は、なほも留つて残務を整理した後、國民の歓迎を受けることを避けるため、變名して旅程に上り、竊かに懐かしい父母の家に歸つた。彼女は、右の手の行うた善事を左の手に知らせることさへも厭うたのだつた。しかし、彼女の歸國したことは、程なく人々に知れ渡つた。賞讃・歓迎は、雨の如く、霰の如く、彼女に降り注いだ。「私は神の前で、私の盡すべき義務を行つたのに過ぎません。」彼女は、たゞかういつて、靜かな家郷に疲れた心身を養ひながら、神の恵を感謝してゐた。

ヴィクトリヤ女皇は、彼女の功勞に感謝の意を表するたため、特に慈悲・平和・慈善の諸徳を象徴する十字架を意匠とし

賜うた

徽章  
キシヤウ。

た高貴な賞牌を賜うた。現今全世界の赤十字社が採用してゐる徽章は、即ちそれである。その後、國民によつて贈られた巨萬の金額を以て、ロンドン市外のセント・トマス病院の構内に、宏大なナイチンゲール院を建てて、ひたすら有爲な看護婦の養成に努めることにした。彼女の事業と精神は今もなほ生きてゐる。そして、幾多の婦人をして獻身・犠牲・慈愛の尊い道に奮ひ起たせつゝあるのである。

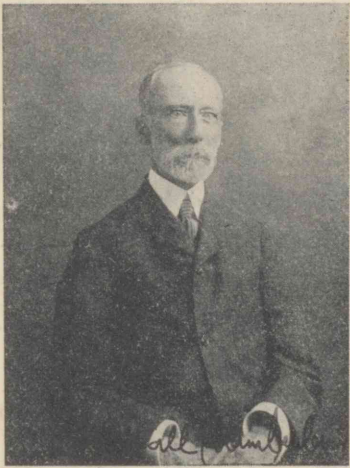
(野邊地天馬 近世偉人物語)

野邊地天馬  
本名は三右衛門。著述家。岩手縣の人。明治十八年生。

### 一三 静かな日

#### 一 チャンバアレン先生

遙かな海のあなた、西の國邊を蔽ふ戰の雲は、いつ晴れよ  
うともせぬ。久しく御消息を  
きかない王堂チャンバアレン  
先生は、どうなさつたであらう。  
餘程前に、手紙と書物をお送り  
した以來、お便りが無い。いつ  
もすぐにお返事がくるにとお噂をしてゐたのに、或朝ねも  
ごろなお手紙を頂いた。中にも、戦争に對する御感想がい



チヤンバアレン

チャンバアレン  
號は王堂。言語  
學者。早くより  
我が國に來朝  
し、嘗て東京帝  
國大學教師た  
り。後、辭して餘  
生を瑞西ゼネ  
ウアに送り、現在  
に至る。(一八五  
〇—)  
戰の雲云々  
この文、世界戰  
争中の執筆に係  
る。

ねもごろ  
ねんごろ。

痛はし

芙蓉  
錦葵科に屬する  
落葉灌木。  
紫苑  
シラン。菊科に  
屬する多年生草  
本。  
おほらか

ろいろ書いてある。「如何なる時でも理想の境へ遁れ得る  
自分を喜ぶ。」とあるのを見て、何が襲はうとも先生は幸福な  
方であると、しみじみ嬉しく思つた。眼はだんじりお悪く  
なるとのこと、文字も曲つて居る。いつまでかういふお  
手紙がお書けになるやら、お痛はしく思ふ。子供らに賜は  
つた繪葉書を、説明してやりながら、涙がにじみ出た。

#### 二 秋 草

秋の庭は、萩や芙蓉の眞盛りである。薄も穂に出、紫苑も  
咲きにほひ、雨は雨でうつくしいとながめ、うす日照る日は  
更に得がたい美しさをあかず見てゐる。女の心もかくあ  
りたい。おほらかに、なだらかに、しつとりとした美しさを

理窟

もちたい。ともすれば、意地や理窟でとげくにならうとする自分の心持を思ふごとに、ぞつとする。

三 寒い朝

「あゝ降つたる雪かな。一寸お見舞申上候。」これは大雪の日に、紅葉山人から送られた葉書の句であるが、今でも寒い日などには、その短い句から、それを書かれた紅葉さんの面影が、はつきり思ひうかべられる。かつてある高等女學校で、齋藤綠雨といふ名を先生が問うたのに、誰一人知つてをる人がなかつたとのことを聞いて、



紅葉の葉書

紅葉山人

尾崎紅葉。本名徳太郎。小説家。東京府の人。明治三十六年歿。年三十六。

齋藤綠雨

本名賢。小説家。評論・隨筆家。三重縣の人。明治三十七年歿。年三十八。

小川町  
東京市神田區小川町  
皮肉

小川町の家に來られた綠雨さんの皮肉な微笑が思ひ出されたことであつたが、今また綠雨さんや紅葉さんを知つて居る自分の年をとつたにも驚かされる。

四 時計

古い懷中時計が三つばかりある。何度時計屋の世話になつたかしのれない。いくら修繕してもよくならぬらしい。毎日根氣よく正午に合はせてみても、三つが三つながら違つてゐる。以前は腹もたてた。漸く此の頃あきらめかけてゐるものの、いよく手にとつてみる迄は、或はといふ願の糸が、心のどこかに懸つてゐるやうな氣がする。同じ時刻に同じ事をくり返しながら。

根氣よく

願の糸

五 春雨の日

春雨けぶる静かな日の午後であつた。めづらしくも自分と娘と二人ぎりの時があつた。廣くもない西片町の家ながら、常に人の出入の繁いのに馴れたものは、二人ばかりになると、何だか寂しいやうな氣がする。とかく末子のくせがついてゐて、みんなが子供あつかひにしてゐた娘は、何事にも無頓著すぎる。丁度よい機會と、火鉢を中に相對した自分は、親の思ふことのいろくを話した。うつくしい夢にあこがれる少女心に、にがい實際論を話すことは、かなりの骨折であつた。しめやかな雨は、をやみなく降つてゐる。

(佐佐木雪子—西片町より)

西片町  
東京市本郷區西片町。

無頓著  
ムトンヂヤク。  
何事も心にかけること。

實際論

佐佐木雪子  
東京府の人。明治七年生。

一四 七月の星座

毎年夏になつて、そろく夕方の風が戀しい頃になると、物置にしまつてある竹製の涼み臺が中庭へ持出される。これが持出される日は、私の單調な一年中の生活に、一つの著しいくぎりを附ける重要な日になつてゐる。まう明日あたりは涼み臺を出さうぢやないかといふ事が、誰かの口から言ひ出される。しかし其の翌日が雨であつたり、さうでなくても、色々の事に紛れたりして、つい一日二日と延びる。其の中にいよく、今日はと云ふ事になつて、朝の内に物置の屋根裏から臺が取下され、一年中の塵埃や黴が、ぬれ

單調  
變化のなきこと。

黴  
カビ。

雑巾で丁寧<sup>に</sup>拭ひ清められ、それから裏庭の日影で乾かされる。そしていよ／＼夕方になつて中庭に持出されると、それで始めて私の家に本當の夏が來たといふ心持になるのである。

涼み臺の外に、折疊み椅子が三つ、同時に並べられて、一同が中庭へ集る。まだ明るい宵の中には、繩飛をする者もある。寫生帖を出して、おばあさんの後姿をかいてゐる者もある。明朝咲く朝顔の蕾を數へて報告する者もある。幼い女兒二人は、縁側へ色々な花を並べて花屋さんごつこをする事もある。暗くなると、花火をしたり、お伽噺をしたり、おばあさんにお國の話させたりしてゐる。幼い子等に

後姿

幻像  
ゲンザウ。家鴨  
アヒル。

は、まだ見たことのない父母の郷國が、お伽噺の中の國のやうに、不思議な幻像に満たされてゐるやうに思はれるらしい。例へば、郷里の家の前の流に家鴨が澤山遊んでゐて、夕方になると、上流の方の飼主が小舟で連れに來るといふやうな、何でもない話でさへ、何かしら一種の夢のやうなものを、幼い頭の中に描かせると見える。それでいつもお國の話<sup>を</sup>ねだつては、おしまひに「あたしもお國へ行きたいなあ。」と一人が云ふと、まう一人が同じ言葉を繰返すのである。子供等の亡祖父の若かつた頃の昔話も屢々出る。私自身が子供の時分に幾度も聞かされた話が、また同じ母の口から出るのを聞いてゐると、それがまう遠い／＼昔の出來事で



會津戰爭  
 明治元年、會津藩主松平容保が奥羽越後の諸藩と聯合して反せし時の戦。  
 西南戰爭  
 明治十年、西郷隆盛の反せし時の戦。  
 淨化  
 純化  
 をさめる

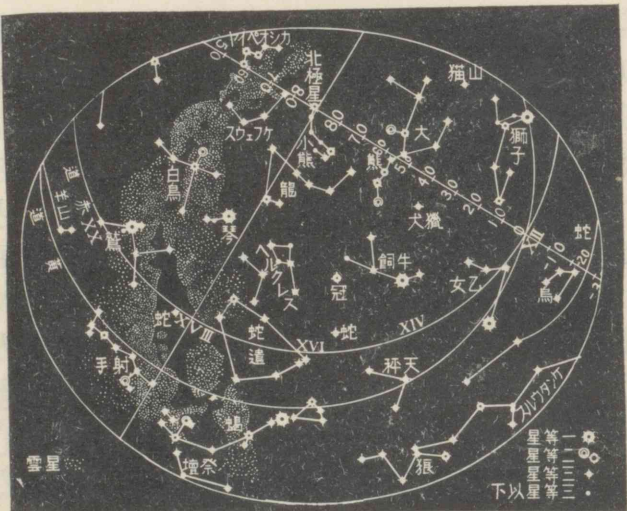
あつて、數年前まで生きてゐた私の父に關する話とは思はれないやうな氣がする。まして祖父を見た事のない、或は臚げにしか覺えてゐない子供等には、會津戰爭や西南戰爭の昔話は、書物で見る古い歴史の斷片のやうにしか響かないだらう。そしてそれだけに、却つて祖父に對する懐かしみは、淨化され、純化されて、子供等の頭の中の神殿にをさめられるだらうと思はれる。

今年の夏、涼み臺が持出されて間もなく、長男が宵の中に南方の空に輝く大きな赤味がかつた星を見つけ、あれは何かと聞いた。見るとそれは火星であつた。星座圖を出して來て、其の上に鉛筆で現在の位置をしるし、其の脇へ日

遊星  
 太陽の周圍を週行する星。

動機

星宿



七月の星座

氷のやうな光を投げてゐた。

附をかいて置いて、此の夏中の此の遊星の軌道を、圖の上で追跡して見ようといふことにした。それが動機となつて、子供は空のよく晴れた晩には、時々星座圖を出して、目立つた星宿を見較べてゐた。其の頃は、まだ織女や牽牛は、宵の中にはかなり東にあつた。西の方の獅子宮には、白く大きな木星が、屋根越しに

素人  
シロウト。

空を眺めてゐるうちに、時々流星が飛んだ。私は流星の話をすると同時に、熱心な流星観測者が、夜中空を見張つてゐる話をして、それから新星の発見に關する話もして聞かせた。おもだつた星座を諳記してゐれば、素人でも新星を発見し得る機會はあるといふ事も話した。

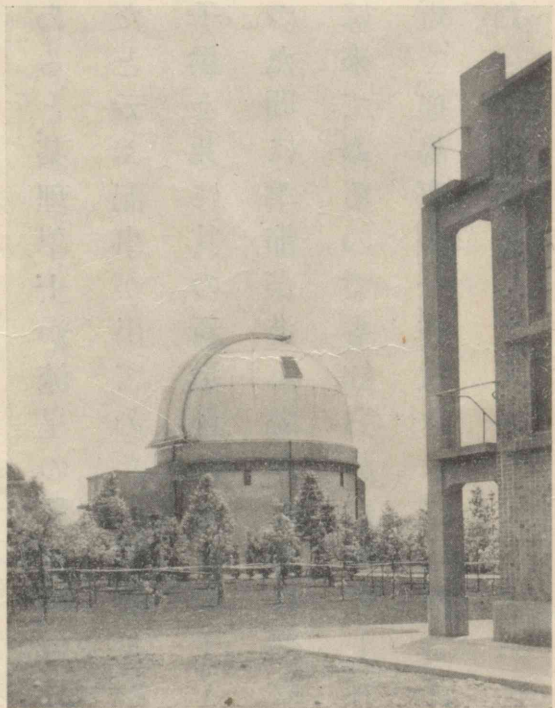
一秒時間に十八萬六千哩を走る光が、一箇年かゝつて達する距離を單位にして測られるやうな、莫大な距離をへだてて散布された天體の二つが、偶然接近して、新星の發現となる機會は、譬へば盲龜が百年に一度大海から首を出して、孔のあいた浮木にぶつかる機會にも比べられるほど少さうであるが、天體の數の莫大な爲に、新星の出現は、それほど

莫大

盲龜云々  
法華經その他の  
經典にある句。  
容易に會ひ得ざ  
るにたとふ。

宇宙

珍らしいものではない。唯光度の著しく強いのが割合に稀である。こんな話よりも、子供を喜ばせたのは、新星の光が數十百年の過去のものだといふ事であつた。我が家の先祖の誰かが、何處かでどうかして、あたと同じ時刻に、遠い宇宙の片隅に突發した事變の報知が、やつと今の世に、此の世界に届くといふ事であつた。



(村鷹三郎摩多北府京東)臺天文

八月になつてから、雨天や曇天が暫く續いて、涼み臺も片隅の戸袋に立てかけられたまゝに幾日も經つた。

或朝、新聞を見てみると、某理學士が流星の觀測中、白鳥星座に新星を發見したと云ふ記事が出てゐた。其の日の夕方、涼み臺へ出て、子供と共に其の新星を搜したらすぐ分つた。暫く見なかつた間に季節が進んでゐる事は、織女、牽牛が宵の中に眞上に來てゐるのでも知られた。そして新星はかなり天頂に近く、白鳥座の一番大きな二等星と光を争ふほどに輝きまたゝいてゐるのであつた。

「暫く怠けたので、新星を發見しそこなつたね。」と云つたら、子供はどう思つたか、顔を眞赤にして面白さう

二等星

に笑つてゐた。

其の中にまた曇天が續いて、朝晩はまう秋の心地がする。どうかすると夜風は涼し過ぎる。涼み臺もつい忘れられがちになつた。従つて星の事も、まう子供の頭からは消えてしまつてゐるらしい。新星の今後の變化を研究すべき天文學者の仕事は、これから始まるので、學者達は毎晩曇つた空を眺めて、晴間を待ちあかしてゐる事であらう。

(吉村冬彦「冬彦集」)

吉村冬彦

本名は寺田寅彦。理學博士。東京帝國大學教授。高知縣の人。明治十一年生。

天の川さやかにすみて遠蛙なくね親しき夜ごろとなりぬ

一五 眞夏の海

湛へて

青空のもとに満ち湛へて

眞夏の海は輝く

南極と北極とを繋いで

島と船とを浮べてゐる

松林を通り抜けて

熱砂の丘を越えれば

打寄せる浪がしらに

人は魚のやうに戯れてゐる

熱砂  
浪がしら

轟然  
グワウゼン。

青い海から盛り上つて

轟然として白く崩れる波

走り狂つて磯に遊ぶ

海の子のおもしろさ

抜手を切つて波に乗れば

陸全體が躍つてゐるやうだ

眞夏の海は輝く

高いく青空のもとに

### 一六 國境に立ちて

先ほどからの強雨は、いくらか細めになつたが、雫は細身の蝙蝠傘を透して、私は全くのつぶ濡になつてしまつてゐた。私は黒の背廣の上に薄緑のレインコートを着け、白の運動帽をかぶつた上から、浴室用の厚いタオルをかぶり、それも吹飛ばされないために、その首根をまた一つの薄手なタオルで、後からきつと引締めて、顎下で結んで、餘りを長く垂れさげた。まるで白い兜を冠つた川中島の信玄と云つた風である。かうして私は、國境安別の砂濱に立つたのであつた。

川中島

長野縣善光寺平にあり。

信玄

武田信玄。戰國時代の武將。天正元年歿。年五十三。(二一八一—二二三三)

安別

樺太西海岸にある港。日露の國境に位す。

荒涼

あれはてさびしきさま。

バラック

假小屋。掘立小屋。

積

コウシ。

上つて見ると、沖から見た通りの、それは荒涼たる寒村であつた。

先づ目についたのは、罐詰工場らしい、殆ど吹曝しのバラックであつた。大きい、積ほどの樺色の樺太犬が、のそりとその門前に出てゐた。ざくりくと薄墨色の砂を踏むと、昆布や赤い大きな蟹の殻や、流木の碎片や、何かの脊椎骨などが雨にじつとりと濡れて、北海の漁村らしい臭氣が鼻を突いて來た。



安別の海岸

たうとう國境まで來たのかと思ふと、私はひえくとし  
た雨の濕りに顫へたが、また子供のやうに其處らを駈廻り  
たくもなつた。

車前草

オホバコ。車前  
草科に屬する多  
年生草本。

「や、車前草だ。素敵々々。」

それは樺太車前草とでも云ふのだらう、すばらしく大き  
な葉だ。それが實に柔かな緑を輝かしてゐる。砂濱から  
一段上ると、その車前草に縁取られた徑が續く。大勢通つ  
たためか、ひどい泥濘になつてゐるので、私は草の上を歩い  
た。

泥濘

ダイネイ。

たこねてわろ  
とこ

「や、驚いた。馬鈴薯の花だな。」

内地では五六月ごろの薄紫の馬鈴薯の花だ。葦の黄色

葦

シベ。

い新鮮な花だ。

「や、菜の花だな。これは驚いた。」

とある漁師の家の窓からは、女の子がたつた一人顔を出  
してゐた。その前の畑には、雨に濡れた黄色の菜の花が咲  
き群れてゐた。それに豌豆の花。背の低い唐黍。葱坊主。

唐黍

タウキビ。玉蜀  
黍のこと。禾本  
科に屬する一年  
生草本。

私はまた、びしやくくと緑草の上を歩いて行つた。

雨が次第にあがりかけて來た。が、まだ横なぐりに吹き  
つけることがある。

砂濱には、細い丸太の長方形の高い柵が、その雨と風との  
中に寂しく侘しく續いてゐた。網小屋のやうなものも目  
についた。私は道づれの巡查さんに尋ねて見た。

侘し  
ワビし。

「これは何ですか。」  
 「鯨の乾場であります。これは廊下と申しまして、こゝへ鯨を乾すのであります。」

「この小屋は？」

「これは納壺なつぼであります。網や雜具を入れるのであります。」

その外に大きな釜が二つづつぐらゐる。据ゑつばなしになつてゐて、どれも激しい鯨の臭氣に充ちてゐた。釜の中のは鯨粕であらう。粕の上には雨が降り溜り、脂がぎら／＼と浮いてゐた。季節はづれだし、無論そこらには



鯨 粕 の 乾 燥

納壺  
 納屋に同じ。物  
 置小屋。

据ゑる

鯨らしいものは影も見えないで、たま／＼昆布などがひらひらとしてゐるだけであつた。

と、鴉カラスが飛んだ。大きな黒い鴉だ。

大きい納壺の一つは、戸が開けつばなしになつてゐて、すばらしい黒熊の毛皮が、その形なりにぶら下つてゐた。その黒に黄の交つた粗々しい毛竝には雨霧が降りかゝり、内側の白い皮までがすべ／＼と冷えきつてゐて、何となく無氣味であつた。その納壺の奥には網が積まれ、土間には赤ん坊を背負つた髪カミの赤い目の大きな女の子が、たゞむつつりとして時化波トキカハの荒海を眺めてゐた。一行の二三は、その中へづか／＼とはひつて行つた。吊された熊の毛皮が、く

時化波

るくると顎のあたりから廻り始めたのも薄氣味が悪かつた。

駐在所チヤウソウがあり、郵便局があつた。間を隔ててぼつりくと。それはバラック式のはかないものであつた。以前に、國境守護クニサキの駐屯兵チヤウトンが住むために急造したといふ小舎コヤのままであるらしかつた。東洋風の簡素なものだ。

だが、何といふ巨大な虎杖であつたらう。それらの小舎のうしろの丘の崖から下の裾まで叢生した虎杖の、早くも蟲がついて黄ばみかけた葉の間には、今まさに淺黄緑の花が咲き盛つてゐた。それに丈の高い女郎花に似た黄色い草花の目ざましさはどうだらう。私はまた立停つて、これ

虎杖  
イタドリ。蓼科  
に屬する多年生  
草本。

景趣

等の初めてみる樺太の景趣に目を圓くした。それはそれは燃立つやうな赤い細かい實の、つやくくと群がつてゐる、名も知らぬ木の藪があつた。

「あれは何の實だ。」

「ななかまど。」と、一人の男の子が私の間に答へた。

風と雨とが、また激しく音を立て初めた。

「おゝい、おゝい。」

前から、後から、わが一行の數々が、その風と雨と、しぶいて飛んでゆく霧の中とから呼び應へる。

かうして、私たちは國境の天測點へと、草ばかりの一つの丘の頂邊を目ざして、泥濘のひどい小徑をうねりくして



ななかまど  
七竈。薔薇科に  
屬する落葉喬  
木。

しぶく

天測點



路  
フキ。菊科に屬  
する多年生草  
本。

登りかゝつたのである。

既に天測點を見極めて續々とおりて來る誰彼は、頭の上  
に驚くほど大きな露の葉を傘代りにかざしてゐた。

「ほう、それが樺太露ですか。」

「え、大きいでせう。」

「何處に生えてゐます。」

「そこら一面です。」

「ほう。」と、また驚きながら、私は登つた。靴に卷ゲートルの  
扮装だが、新しく普請した路がまだ柔かな上に、大勢で雨の  
中を踏蹂つたから、靴も何も泥まみれだ。それに足がかり  
も悪く、坂は急になるので、迂ること夥しい。私はたうとう

ゲートル  
脚絆。

扮装  
イデタチ。

普請  
フシン。

のめる

柄  
ガラ。  
華奢

虔まし  
ツツまし。

のめりさうになつて、強く突きたてた蝙蝠傘に、思はず全身  
の重みを託したので、それが弓のやうに撓むと、その柄から  
ぼきりと折れてしまつた。柄にも無い華奢なステッキ用  
蝙蝠傘などを買つて來たのが、そもぐの過であつた。私  
は苦笑して、その柄と傘の尖とを兩手に持つた。

そこらは虎杖の花盛りであつた。樺太虎杖の花は、内地  
で見るやうなほのくとした淡紅色を含んではゐないが、  
その緑がかつた薄黄な花は、却つて虔ましくてあはれであ  
つた。それが雨と霧とに濡れしづくになつてゐた。

太い丸太の無雜作な柵に圍まれて二坪ばかりの場處が  
あつた。その柵は朽ちかけて、既に丸太の外皮のところど

ころはぼろ／＼に頽れてゐた。その中に日本と露西亞との境界標石が嚴然と立つてゐた。正方形の臺座に据ゑられた鼠色のその標石は、高さは二尺にも満たないであらう。北面に鷲南面に菊の御紋章が浮彫りにしてあつた。私は露西亞領の虎杖の叢にもはひつて見た。

北を眺めると、その海岸線は南と同じやうに、さして高からぬ丘陵が續いて、立枯のとど松の疎林が、しきりなく流れる雨雲の下に、ぼう／＼と打煙つて見えた。寂とした國境であつた。

(北原白秋「フレッパトリップ」)

とど松  
松杉科に屬する  
落葉喬木。

北原白秋  
本名隆吉。詩人。  
歌人。福岡縣の  
人。明治十八年  
生。

稚内  
北海道北部の  
町。ノシヤツプ  
岬の東岸に位  
す。宗谷海峡に  
臨み、樺太との  
連絡點なり。



九條武子

### 一七 林より街より

#### 一 白樺と落葉松の林

たうとうこんなところまで来てしまひました。稚内港をはなれて船に乗りました晩は、雨で、いかにも北の果らしう御座いました。が、却つてこちらに渡つて見ますと、なか／＼と／＼のつてをりまして、寂しい氣分も御座いませず、氣持のいゝ涼しさで御座います。到るところ、白樺と落葉松の林で御座いますが、近

クリープ  
こけももの方  
言。

眞岡  
樺太西海岸の港  
市。

年、毛蟲の爲に枯らされて、見るから惜しいやうに思はれま  
す。

みやまりんだうの美しいさえた紫の花は、御目にかけて  
いやう。クリープの可愛い實も、まつ赤に美しい色をして  
をります。たゞ、あまりに夜が静かなので、窓を明けて見ま  
したら、不思議に、蟲の聲が少しも致しません。秋らしい氣  
分なのに、なにやら物たりませぬ。

明日は、十九里の山道を、西海岸の眞岡へ出ます豫定で御  
座います。寒帯の森林のながめを樂しんでをります。

東京は、さだめてまだ殘暑が嚴しう御座いませう。  
はるかに御機嫌をうかゞひます。

八月二十七日夕

樺太豊原町にて

二 今の身にとりて

唯今はわざくの御使にて、うつくしき御羽織いたゞき、  
今の身にとりて、何よりの御心いれの御品と、いつまでも、厚  
き御心を嬉しういたゞき候。いづれ御めもじにて、萬々御  
禮申上げたう候へども、とりあへず御うけまで。かしこ

十月二十七日夕

三 自ら畫き彫り候もの

御すこやかに渡らせられ、めでたく存じ上候。恐ろしき  
おもひでの一めぐりと相成候。其の折には、いちはやく御  
同情のたまもの、かずくいたゞき、御まごころのかたじけ

恐ろしきおもひ  
で云々  
大正十二年九月  
一日の大震災の  
思出をさす。  
いちはやく

今の身にとりて  
云々  
大正十二年十月  
の執筆に係る。  
めもじ  
會ふことの敬  
語。女子文に用  
ふ。



手くね九條武子作

なさ、言の葉に盡しがたう存じをり候。此の品まことに御はづかしき出来には候へども、せめて御禮心に、千々の一つにもと、みづから畫き彫り候ものに候。御をさめたまはりたく進じあげ候。かしこ

九月一日

四 三河島千軒長屋より

この間は御目にかゝれまして、嬉しう御座いました。御人数は少くても、ほんたうに心持のいゝお集りほど嬉しいものは御座いません。私は旅にばかり出まして、何の準備

九月一日  
大正十三年九月  
の文。  
三河島  
今東京市荒川区  
にあり。

仕事  
病に苦しめる貧  
民を治療する診  
療所の仕事。

の御手傳もいたさず、さだめていろく御配慮いたさきましたことと存じます。

今日から、三河島千軒長屋と申すところに御座います本願寺の會館を借りまして、仕事をはじめました。府下でもわけて悲惨な人達の住んでをられるところで御座います。窓のすぐ近くには、火葬の煙が盛んに上つて居りますところで、貧しさと病とに苦しむ人達の話を聞きますと、胸がしばいになつてまゐります。でも、かうして皆様に力づけていたゞきまして、働かせていたゞくことは、私としてほんたうになさなければすまないことと、つくづく感じられます。午後からはじめまして、もう五百人ほど見えたやうで御座

博士  
治療に従事する  
醫學博士。  
大車輪

います。博士たちは、お茶一杯召しあがるひまもなく、次から次へと大車輪の御働、そばで拜見してゐても、涙ぐましいやうで御座います。

二十日に、もしお天氣で御座いましたら、御都合遊ばして一度御出かけを願ひ上げます。二時半に、上野驛で御目にかゝることにいたしませう。一寸でも御風邪氣かおのどもお悪う御座いましたら、御無理遊ばしませぬやうに。かなりごみく／＼して居りますから。どうぞ御身御大切に。

十二月十七日

三河島千軒長屋仁風會館にて

(九條武子―九條武子夫人書簡集)

九條武子  
歌人。京都市の  
人。昭和三年歿。  
年四十二。

一八 滅びぬもの

大正五年九月一日の大震災の  
のありさま

永遠の記念日と銘せられた大正十二年九月一日、その午後、帝都の大空に出現した不思議な巨雲、何とも形容の仕様のない巨雲、恐ろしい恐ろしい奇しき魔の力、大自然の祕密を罩めた、あのもく／＼とした入道雲よ。それは果して雲と呼ぶべきものだらうか。地中に潜んでゐた千古の火を含んで燃上つたラヴァアではあるまいか、今ぞ今この世界が渾沌の昔に還る一刹那の莊嚴な姿ではあるまいか、地球の生物は皆滅んで、冷たい青白い月の世界と化するのではあるまいか、人類の滅びる約束の日が來たのではあるまいか。

家のやけ

四十萬トキ五百

人

百五十三萬人

罩める  
コめる。

ラヴァ  
ア  
焼石。

渾沌  
コントン。

未來記

或未來記にかりそめの戯筆で記されたそんなことなどが  
思ひ出される。どこともなく引續いて響き渡る爆音。雲  
は益々押擴がつて行く。

物皆滅びようとする、地上の物はすべて滅びようとする、  
宇宙は空の空とならうとする。ルナンはいつた「自然は絶  
對に無感無覺のものなり、超越的に背道義のものなり。」と。  
お、悲しくも人々は今眼前にこの冷たい言葉を承認しな  
ければならない。

あゝ、世は遂に滅びるのか、空しく滅びるのか。かう思つ  
て流れ止まぬ涙の底から、力強く「否とよ、否とよ」と叫ぶ聲が  
聞える。それは今まで沈黙してゐた魂の聲だつた。更に

ルナン  
フランスの宗教  
史家。(一八二三  
—一八九二)  
背道義

魂の聲

脅威  
ケフキ。

問うた

人類の意志



(一) 都 帝 の 興 復

魂の聲は静かに嚴かにいふ。「否とよ、否とよ。地上の形の  
あるものはすべて滅びる日もあらう。けれども、こゝにた  
だ一つ滅びないものがある。自  
然の脅威にも暴力にも抗して斷  
じて滅びないものがある。それ  
を知らないか、人の子よ。」私は魂  
の聲に問うた。「お、この日この  
時、地上に滅びないものがあるか。」  
澄み渡つて答へる聲がした。「あ  
る、唯一つある。それは人類の意志だ。」私はその聲を聞き  
て、始めて自分の足が大地に立つてゐるのを見出した。そ

廢墟

して、堅い信念が私を包んだ。あゝ、滅びることのない人類の意志よ。私は涙に濡れた瞳で、靜かに大空を仰ぎ見た。

おゝ、受難の帝都よ、廢墟の首府

よ。秋の月は無心にその傷ましい殘骸を照らしてゐる。しかし、依然として存在してゐるものは、人類の意志である。たとひ、樂堂は倒れ、ピアノは焼け、琴の絃は切れても、どうして人類の意志の生んだ音楽が減びようぞ。彩管は焰に燃え、畫布は烟と消えても、どうして人類の意志の生んだ美術が減びようぞ。書



(二) 都帝の興復

彩管

詩歌の殿堂

呼び合うて  
呼び合ひて

文化の花

吉屋信子  
小説家、新潟縣  
の人。明治二十  
九年生。

庫は灰燼と化し、筆は折れ、紙は破れても、どうして人類の意志の生んだ詩歌の殿堂が減びようぞ。げに人類の意志の力は、永久に失せない、滅びない。火焰の中に親子兄弟が悲しや互に名を呼び合うて斃れても、その最後まで保ち合つてゐた愛情、その健氣な意志は滅びない、決して滅びない。げに地は壞れ家は焼けても、決して滅びないものは人類の意志である。

私どもはあくまでもこの意志を強く保ちたい。そして更に文化の花を美しく咲かせるために、復興の帝都の礎にもと、小石の一つでも自分の手で運びたい。

(吉屋信子)

### 一九 この一躍

脂が乗る

あとに残つた第五回目。今度こそ跳ばねば、又今日もあのスタン드의優勝マストに英國の國旗を繚こまされるのだ。第六回目もあるが、それには殆ど力が盡きて十分に脂が乗

らないのが常例だ。



人見絹枝

この五回目。私は案ぜずにはあられなかつた。更に二回の歩測をやり直した後、私はその當日、私の持つすべての力を併こしその五回目の成

慘酷  
ザンコク。

纒かに  
ワヅかに。

績は甚だ悲惨な結果を來した。みじめとか慘酷とか、言うても言ひたらぬものであつた。

踏切脚は更に合はない。しかもその時には左脚が踏切板に纒かに懸つたばかりであつた。身體に十分ばねのつかぬ上に、私は心にあせりを覺えた爲、空中で行ふべき挟み跳に無理が出來て、平常の通り著陸前脚を前方に延ばすと同時に、兩手を上方に引上げようとしたその時、やすりのかかつた鋭い靴のスパイクで、自分の右手の掌を六箇所も深く引裂いてしまつた。

審判員

記録は五米三一。私は何といふ立場に置かれたのであらうか。審判員の持つ卷尺のメートルの度盛をちつと見



どよめき

ファイナル  
決勝。競技に用  
ふる言葉。  
観衆

つめた時、私には殆ど希望も力も無くなつた。  
脱ぎすてたオーバースエーターを著た下に、傷ついた手を隠しながら、黒田マネージャーの傍に戻つて來た。  
瑞典のプラチーノ選手は、見事五米一六のレコードを示す。しかし七萬近い観衆は、一寸拍手を送つた許りで、又直ぐ元の静けさに歸つてしまつた。何のどよめきも無く、場内の空氣はいやな程落著いてゐる。今にも一大變事でも起るかの感を持たせる。

槍投もファイナルに進んでゐる。鐵彈投のファイナルはもはや終つたらしい。観衆七萬の人達は、槍投の結果にも、鐵彈投の勝負にも目もくれず、たゞあと一回残されたガ

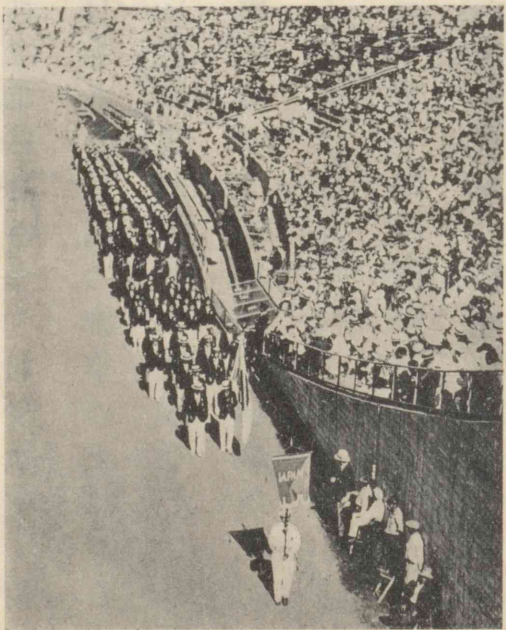
浮んで  
浮びて

痙攣  
ケイレン。筋肉  
のひきつること。

ン選手と私との決戦を待つてゐる。英國勝つか……又日本この私が勝を取るか……鳴りを沈めてその結果を待つてゐるのであつた。

ガン嬢の面には軽い喜の色が浮んで見える。「人見さん。しつかりやれ。あとまう一回あるからな。」といつて下さる黒田マネージャーの顔。

それはまう常人とは思はれぬ程青くなつて、その唇はしきりに痙攣してゐる。私の心は此の時どうであつたらう。



式場退クツピンリオ

みすく

ゴッド・セイブ・  
ゼ・キング  
英國の國歌。

繰言  
クリゴト。

あとに残つたのは本當に一回きり。この一躍で、私は今日の試合を閉ぢねばならぬのだ。どの様なことがあつても、この一躍に成功しなければならぬ。さもなければ、みすみす英國の國旗が、又今日もあの最高の旗竿の上につるされて、ゴッド・セイブ・ゼ・キングの歌を聞かされるのだ。昨日から見飽きる迄、英・佛國旗は揚つてゐる。どうか今日たつた一度……一度だけでよい、それだけ叶へて貰ふことは出来ないであらうかと、繰言をする外はなかつた。

若し自分を救ふ神様があるならば、私の右脚についてこの一躍を助けて下さい。あゝ、今日こそ日章旗を揚げたいものだ……。若しこの不成績を故國にゐる父母等が見た

氏神

走巾  
走巾跳のこと。

ならば、どんなに悲しむであらう。此の間も郷里の方からの手紙に、「お前が家を出てからといふものは、母と姉はお前の勝利を一日に二度、氏神様に詣つて祈つてゐる。國の爲だからしつかりやつてくれ」といふ意味のものが、二通迄も届いてゐるのである。

「走巾できつと勝て！」といつて下さつた方々にも、世間の人等にも、どの様に言つて詫<sup>わ</sup>びられよう。御詫だけでは濟まない。あゝ最後だけを……。

私のこの苦しい氣持を七萬の觀衆や、百六十名近い各國の選手へは勿論、唯一人の黒田マネージャーにさへも話すことが出来ず、一人で苦しんで居つた。その瞬間、泣くにも

征途の門出

木下博士  
木下東作。醫學  
博士。當時日本  
女子スポーツ聯  
盟會會長。

泣かれなかつたのであつた。  
あゝ最後だ。跳べるだけ跳んで見よう。  
覺悟はして立つたが、併し私には自信も希望も凡て絶たれてしまつたあとであつた。かうして最後に助走路のスタートに立つた時、私は急に思ひ出した。  
七月八日午後八時、下關行の特別急行で、この征途の門出にのぼつたあの時、大阪驛で漸く暮れたばかりのホームのベルのけたゝましい音を後にして、汽車が動き出さうとした時、木下博士が「人見さん、もうそんな寂しい顔はよしてくれ。先生だつて一人で年若い娘を旅立たせるには心配だ。併し君も二十歳だ。この大任を果して歸る日がきつとあ

餞別  
センベツ。

慈父

ることと思ふ。僕は貴女イナガに何か餞別をやりたいが、何も別にこれといつて與へるものはない。唯この作つて上げたユニホームとパンツ、是は先生だと思つて向うに行つて身につけて競技場で奮闘してくれ。貴女の苦しむ時はきつと先生も案じてゐると思へ。それから今一つある。それは向うに行けば、一人の日本人である黒田氏にも話すことが出來ず、外に誰にも知らせられぬ、泣くに泣かれぬ時もあるだらう。併し、その時は貴女は目を閉ぢて、日本の神様を拜め……きつと貴女は救はれる。……なあ！きつとさうするのだよ。元氣で行つて來い。」かういつてくださつた慈父にも勝るその御心を思ひ浮べて、私は靜かに目を閉ぢ

絶え<sup>た</sup>る

て、「どうか一度です。跳ばして下さい。」と夢中に祈つた時、今迄耐へて居つた涙が急に兩頬を傳はるのでした。拭いても拭いても涙は絶えない。側にあるガン選手に對して恥づかしいほど涙が出る。

助走の三十米餘の地面がぼんやりかすむ。

夢中で走り出したその最後の一躍……今迄合はなかつたその脚も、八寸の踏切板に一分一厘の違ひなく、右足が強くあつた。占めた……跳べた。始めて跳べた。記録五米五〇……私は直ぐに大聲を出して喜びたかつた。併しよく考へれば、私の後にはまだガン嬢の一躍がある。ガン嬢を見た時、同嬢はしきりに深呼吸をしてゐる。そ

フアウル  
違法と譯す。競  
技に用ふる言  
葉。



躍

して終に走り出したその時、私はその助走の有様を何も見ない。たゞ八寸の踏切板を見つめた……。今も私の眼に明かに残るそのガン選手の左脚。踏切板の前五分ばかり

フアウルになつた。

あゝ……初めてガン選手に打勝つことが出来たのだ。アナウンサーの聲もほがらかに決勝の報告がされた。その聲の終るか終らぬ中に、今迄静まり返つてゐたスタンドの觀衆は、一齊に總立ちになつて、そのスタンドを靴でたゞく音、破れる様な拍手、暫

ハロー  
おーい。呼びか  
けの言葉。  
吹奏裡に  
スキソウリに。  
掲揚  
ケイヤウ。

人見絹枝  
元大阪毎日新聞  
記者。岡山縣の  
人。昭和六年歿。  
年二十五。

くは止まなかつた。「ハロー、人見、人見」の聲を浴びせられながら、高高と日章旗はスタンドの中空高く「君が代」の吹奏裡に掲揚された。  
これを見た黒田マネージャーと私とは、今迄の苦みも急に嬉しさに變り、フィールドの中で泣けるだけ泣いた。多くの白人の中にたつた二人の日本人が、日章旗の下で泣いたその涙は、ほんとに美しいものに違ひなかつた。この時こそ始めて自分は日本の天皇陛下の赤子の一人に成り得たものと思つた。  
(人見絹枝「スパイクの跡」)

二〇 伊能忠敬

伊能忠敬  
もと神保氏。上  
總の國に生る。  
下總の國佐原の  
伊能氏を嗣ぐ。  
高橋東岡に就き  
て曆學測量法を  
學び、宇内輿地  
全圖を著す。文  
政元年歿。年七  
十四。(二四〇五  
一四七八)  
才氣

一舉手一投足の  
勞  
身を委ぬ

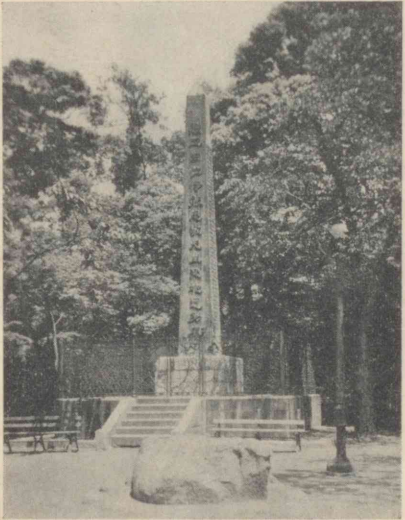


伊能忠敬

忠敬年十八にして伊能氏の養嗣子となり、五十歳にして家をその子景敬に譲るまで、自ら抑へて平々凡々の人となり、一意専心たゞ伊能家の衰へたるを興し、己が任務を最も圓滿に、最も美しく果さん事を期し居たりき。凡そ才氣ある者の常として、己が欲せざる事には、一舉手一投足の勞を免れがたき習なり。たとひ己が欲せざる事なりとも、その爲

徳量

なさざるべからざる事たる以上は、甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へて、わが爲すべき事を爲すは、その人、晉に才氣あるのみならず、また實に徳量ある人なりといふべし。世に才氣ある人は多し、才氣ありて徳量ある人は少し。徳少くして才のみ優れたるは、譬へば鋭き刃の肉薄きが如し。物を截る事はよくすべし。折るゝ恐は免るべからず。されば才子の奇才を抱きながら、成功を見ずして中途に事を廢する例は、數へも盡し難し。



伊能忠敬遺功記念碑

算數 數學のこと。  
 曆象 曆を推して天文を觀ること。  
 市井 町なか。  
 榮えしむ 榮えしむ。

憂ふ。

忠敬は、算數・曆象の學を嗜み、かつこれをよくすべき資を抱きながら、自ら甘んじて市井の凡人に伍し、伊能氏を嗣ぎたる上は、伊能氏を榮えしむべし、といふを、唯一の希望として、三十餘年一日の如く、ひたすら家業に丹誠したるが如きは、實にその徳量の大なるを見るべきなり。

かくの如くにして伊能家は興りぬ、景敬は家を嗣ぎぬ。一家の事また憂ふべきものなし。忠敬が伊能家に對する義務は、こゝに於て圓滿に果されたりといふべし。忠敬は始めて閑散の身となりぬ。忠敬の身は、これより忠敬の自由に用ふることを得べし。この時は、忠敬年既に五十歳、常人にありてはもはや老境に入るべき時なり。されど心の

花月の遊

風流な遊び

老いんとする

佐原

千葉縣香取郡

飄然

曆法改正

寛政九年(二四  
五七)に成る。寛  
政曆これなり。

高橋作左衛門

名は至時。號は  
東岡。大阪に生  
る。曆學を好み、  
天文を學び、遂  
に幕府に拔擢せ  
られて曆法改正  
の事に従ひ、寛  
政曆を作る。文  
化元年歿。年四  
十一(二四二四  
一四六四)

壯んなる人には何歳の時も前途多望なる青年の春なり。爲すある人には如何なる場合もわが力を試むべき所たり。忠敬は、常人が世の務を辭し、花月の遊を事とすべき時に當つて、始めて學に就き、而して後漸く世に出でんとせり。後の爲すあらんと欲する者、苟も眞に爲すあらんと欲せば、青年空しく過ぎて身の將に老いんとするを歎ずる事なかれ。さるほどに、忠敬はその郷里佐原を出でて、飄然として江戸に到り、萬を深川に定めて一學生となれり。かくして忠敬は身をおのが好める學に委ねたるが、おのが満足し信仰すべき師を得ることは容易ならざりき。折から幕府には曆法改正の擧ありて、これがため特に大阪より高橋作左衛

門といふ者を召されたり。作左衛門、東岡と號す。算數、曆象の學に精し。忠敬急ぎ東岡を訪ひ、その學の深きに服して、直ちに師弟の契を結びぬ。時に忠敬は五十歳にして、東岡は三十二歳なりき。

普通の人情にては、おのれより若き人に會ひては、たとひおのれが學業などその人に及ばずとも、なほ強ひて自ら高ぶり、敢へて頭を下げざるが習なれども、徳量ある忠敬は、いかでか眞に敬ふべき學識ある人に向ひて拜伏するを厭ふべき。喜びてそれが門下生となれり。然れども同門の學生等は、師たる東岡の若くして、弟子たる忠敬の老いたるをば、屢、笑柄となしたりといふ。晩學の難きは、實に何れの世

い。か。で。か。……  
厭ふべき

笑柄

セウヘイ。わらひぐさ。

蛙鳴蟬噪  
アメイセンサ  
 ウ。蛙や蟬がや  
 かましく鳴くこ  
 と。

蘊奥  
ウンアウ。學問  
 技藝等の奥義。

肩を比す

にありても、かゝる事實の存するがためなり。これを以て、非凡の士にあらずば、大抵自ら恥ぢて、師に就き學を修むる勇氣を失ひ、終に空しく志を抱いて墓穴に入るに至るなり。本來よりいへば、老いて學ぶは、たまく、その志の淺からざるを顯すのみ、また何の不可かあらん、況んやまた何の恥づべきところかあらん、思ふに區々たる群小の嘲笑も、忠敬に於ては、たゞ蛙鳴蟬噪を聞くが如くなりしなるべきのみ、かゝれば、忠敬と同門學生との優劣勝敗は、比較するまでもなく明かなる事なり。忠敬の學術は、さながら堤防の決潰して洪水の押寄するが如き勢ひを以て歩を進め、終にその蘊奥を極めて、東岡門下に肩を比すべき者なきに至れり。

頽齡  
タイレイ。

辟易  
ヘキエキ。おそ  
 れへこむ。

元氣勃々  
ゲンキハツハツ

幸田露伴  
名は成行。文學  
 博士。帝國學士  
 院會員。東京の  
 人。慶應三年生。

かくて忠敬が、始めて幕府より測量の命を蒙り、その修得したる學術を、實地に運用する機に際したるは、實にその五十五歳の時なりき。五十五歳といへば、人は頽齡用ふるに堪へずとする年齢なり。されど忠敬は氣力旺盛、さながら壯年の人の如く、測量の命下るに會ひて、喜色滿面に溢れ、即時にも出發せんとする勢ひありきといふ。忠敬が事に當りて勇往直前、險阻に屈せず、風濤に辟易せず、遂にその志すところを完成したりしは、一にこの元氣勃々として燃ゆるが如き心を、胸裏に藏めたるによるなり。

誰か日本人を早熟早老の人種なりといふ。これ、豈我に伊能忠敬あるを知らざる者にあらずや。  
(幸田露伴「露伴叢書」)



## 二 壺と提灯

お年寄  
町役人の上席  
者  
町役  
町役人の略。名  
主。五人組等を  
いふ。

下戸

退屈さう



南 京 の 壺 の 瑞 祥 作

さるお町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役、家持の人々、一同が座に著きますると、さまざまの馳走がある。時にかの年寄は、酒と聞いては笹の露にも酔ふほどの下戸ぢや。座中を廻る盃の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちとお菓子なりともお取り下されい。」と、南京の古染附の壺に大輪の金米糖を入れて、年

わるう。  
わるく。

きしむ

無理無體

寄の前へ持つてくる。座中も「これはよいお心づき、ひらにお菓子を召しあがれい。」と、勸むるに、年寄もわるうはなししからば頂戴を致しませう。」と、壺を引きあげ、手首を突つこみしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手をさし入れて撮み出さうとするに、手首がつかまつて抜けませぬ。どうぞして抜けるかと、色々にこじ廻して見ても、引つばつて見ても抜けず、まご／＼して居らるゝと、側から見つけて、「どうなされましたぞ。」いや、手が少し詰りまして思ふやうに抜けませぬ。」と、眞顔になつていはるる。「それは氣の毒。私が壺を持つて居りませう。無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が向うへまはつて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手

景清と美保の谷  
 悪七兵衛景清  
 美保の谷十郎  
 鍛シコロ 兜の後に垂れて、頭を被ふもの。



道話

を前へ引く。互にえいやと引合ふ有様、景清と美保の谷が鍛シコロをするやうなと、座中が一同にとつと笑へど、年寄はなかなか笑はず、泣顔になつて、どうも痛んで抜けませぬ。といふ。さあ、これから大騒ぎになり、醫者どのを呼んで来い。骨接ハネツケではゆくまいか。と、酒宴サケウチの興も醒サマめ果てました。時に五人組が一人進み出で、いづれもお騒オソワぎなさるな。我等承はつたことがある。昔、司馬温公といふ人、幼いとき大勢の小兒と共に、大いなる壺のほとりに遊

司馬温公  
 名は光。字は君實。温公は諡。宋の名相（西暦一〇一九—一一〇八六）

難澁  
 ナンジフ。  
 よう。  
 よく。

しかつべらしく  
 煙管  
 キセル。

びましたが、一人の小兒、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供は、これを見て逃げ歸つたが、司馬温公一人は歸らず、側なる手ごろの石を取つて、かの壺へ投附けましたれば、壺は割れて、はまつた小兒は不思議に命を助かりましたと、或人の話ぢや。今お年寄の御難澁は、この話によつて似てある。いざや、われらが司馬温公となつて、たとへばその古染附の壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕ウデには換へられぬ。と、しかつべらしく煙管をひつさげ、向うへまれば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突き出すと、ただ一打に打碎いた。何がさて、座中は金米糖が散らかつて雪を降らしたやうになると、やれ、お年寄、お助かりなされた

抜けぬこそ道理なれ

片意地

か。と、その手を見れば、抜けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯攫んでゐられたと申すことぢや。なんと可笑しい話ではござりませぬか。攫んだ物を放しさへすれば、自由自在に手は抜けたものを、一度攫んだら首がちぎれても放すまいと、片意地な生れつき、それで自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申せば、錢金の事のやうなれど、攫むものはこればかりではない。器量のよいを攫み、賢いを攫み、負惜みを攫み、家柄を攫み、身代のよいを攫んで、放すまいとかつぎ歩くによつて、教へを聞くこともならず、樂をすることもならず、慎みも出來ず、せん方なさに顔しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとは氣の毒なものでござります。壺割つてし

しまうてしまひて

旅籠屋  
ハタゴヤ。

七つ立  
早う立  
早く立

まうてからは、何いうても詮ないことぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。  
 Q それでもわが本心は明かな、明德は曇つてはない、洗濯するには及ばぬと思ふ人があるものぢや。これを諭へて申しまするに、私のやうな盲が一人旅をして、心安い旅籠屋にとまり、あすの朝は七つ立をさして下され。」と頼む。亭主も心得、朝早う立たせます時、盲は旅の支度をとゝのへ、杖を持つて出ようとする、亭主がいふには、「まだ夜深いに提灯をお持ちなされ。お貸し申しませう。」何をいはしやるやら。盲が提灯を持つて何にするもので、「いえ、お前にはいりますまいけれど、暗がりをとぼく、お出でなさる、

二 壺と提灯

一三七

午後四時  
二  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

おのれ  
古語。今の「おまへ」にあたる。

と、往來の人がゆき當ります。それで提灯をお持ちなされと申すことぢや。「なる程さうぢや。私はゆき當らねども、えて目明がつき當る。さやうならお貸し下されい。」と、提灯をさげて道五六町出ましたところが、向うから來る人が盲にはたとゆき當りました。そこで大きに腹を立てて、おれにつき當るやつは盲か。「向うの人も癩癩に障り、おれは盲ではない。さういふおのれがどう盲ぢや。「いや、おれは盲ぢやけれども、人にはつき當らぬ。おのれが盲にきまつた。」向うの人も愈、腹立て、「おれを盲といふ證據は、何ぞ覺えがあつていふのか。」「お、覺えがある。おのれを盲といふ證據は、この持つてゐる提灯が、おのれが目にはかゝらぬぢやないか。」と、ずつとさし出す提灯の火は、宿屋の門口でとうに消えてしまつてある。なんと氣の毒な盲ではござりませぬか。火もともさぬ眞暗な提灯をさげて、これでも明かなと思つてゐるのは、本心見失うて、身勝手な心を本心ぢや本心ぢやと思ひ、洗濯せうとも慎まうとも思はぬ人によつて似たものでござります。どうぞお互に、火は消えてはゐないかと日々に吟味が致したいものでござります。

(柴田鳩翁 鳩翁道話)

柴田鳩翁  
字は陽方、通稱謙藏。心學者。中年明を失ひ、諸國を遊歴して心學講話をなす。京都の人。天保十年歿。年五十七。(二四四三—二四九九)

盲人千人目明千人  
一盲衆盲をひく  
番町で目明盲に道を聞き

(俚 諺)

(川 柳)

二三四季小品

一 初春の山

後山に上る。

霽  
アイ。

春空霽として四山霞棚引き、争はれぬ春となりぬ。

低う。

海はゆらくとして空と一つに融け、練れるが如き水の面に、富士の白雪ちらく流れぬ。漁舟、鷗よりも小なり。

低く。

村々はまだ冬枯のまゝなれど、霞低う地に這ひ、春四方に満てり。鳶一羽悠々として山下に舞ふ。

落の臺

フキのタウ。落の花軸をいふ。

垂々

ススキ。たれさがるさま。

山崖、畑の畔、到る處落の臺青く萌え、榛の木などはすでに垂々の花をつけ、春蘭も早きは花咲きぬ。枯草枯葉の間よ

春蘭

シユンラン。

簇々

り春は簇々として萌えつゝあり。

二 花月の夜

戸をあくれば、十六日の月、櫻の梢にあり。空色淡くして碧霞み、白雲團々、月に近きは銀の如く光り、遠きは綿の如く和かなり。

微茫

春星影よりも微かに空を綴る。微茫たる月色、花に映じ

風情  
フゼイ。

て、密なる枝は月を鎖してほの闇く、疎なる一枝は月にさし出でてほの白く、風情言ひ盡し難し。薄き影と、薄き光は、落花點々たる庭に落ちて、地を歩す、さながら天を歩むの感あり。

三 涼しき夕べ

戦ぐ  
ソヨグ。

のたうつ  
かいづ  
黒鯛の幼きも  
の。

だぼ鯨  
鯨の類。沿海、潮  
線附近の岩礁間  
に棲息す。  
宿かり  
節足動物中、甲  
殻類に屬す。



日落ちぬ。石垣に腰かけ、足を垂れつゝ釣る。前に残照  
流るゝ川あり。後に青蘆さやくと戦げり。



小川

潮次第に満ち、川逆さまに流れぬ。水澄みて水無きが如く、水底池よりも鮮かなり。小さき鰻は藻より藻にのたうち、今年生れのかいづは隊をなして水色の玉にも似たる水遊びば、其の影ちらくと底に印せり。石垣の穴より出で遊ぶだぼ鯨は、蟹をあげて迫り来る辨慶蟹を避けて身をかはせば、小鰻は杭を抱きて這ひ登り、石垣に縋れる宿かりは、身を投ぐる

様にころくと水底に墜ち行く。

下流の方を望めば、下流却つて上流の如く、水は山影碧深く落つる邊より涼風と共に流れ来る。潮満ち盛れば、残照の影やゝもすれば押流されむとし、小鮮群がりて水を攪すれば、水の流れに其の紋を消し、氈々たる川底の藻は、水に梳られて、今にも流れ出でむとすれば、幾隊の魚苗もとゞまりかねて流れ行く。

垂れたる足の爪先に水とゞく頃は、残照消え、潮も満ちて淀みぬ。鱚跳つてまた水に落つる音、石を投ぐる様なり。

四暮秋

柿の落葉を踏みて、後山に登る。

氈々

サンサン。物の細長き様。

魚苗  
キヨベウ。魚の子をいふ。

鱚  
鱚の幼きもの。

蕭々  
セウセウ。風の  
もの寂しく吹く  
様。

龍膽  
リンダウ。龍膽  
科に屬する多年  
生草本。



啞々  
アア。

玉屑  
ギョクセツ。ち  
らちら降る雪の  
形容。

黄茅蕭々として亂れ、龍膽の碧棘の實の紅と徑を綴る。  
山上より見れば、田は盡く刈られ、麥の綠猶ほのかにして、  
村も瘠せ、晩秋の野いたく寂びぬ。  
烏五六羽あり、山上の樹より立ち、鳴き連れて彼方の村に  
向ふ。啞々の聲滿山に響く。

五 雪 の 日

起出で見れば、滿天滿地の雪。  
午前は粉雪紛々霏々。午後は綿雪片々飄々、終日間斷な  
く降り暮らす。

障子を開けば、玉屑霏々亂れて斜に飛び、後山も雪の爲に  
おぼろなり。風大いに到れば、積りし雪また亂れ立つて走  
る。

午後は愈降りしきりて、馬車も通はずなりぬ。積る雪の  
重みに、何の木にや、ぼきと折るゝ音するもの兩三度。  
滿天滿地一白の中に、獨り前川のみ鼠色にして黒く、鷗十  
數羽來りて遊びつるあり。時々其の二三羽、水を起つて、十  
分に翼を擴げ、風雪に向ひて飛ばむとすれど、吹きやられ吹  
きやられて、空しく水に下りぬ。

盡日霏々濛々、天地雪に埋れ、人風雪に閉ぢられ、斯くて降  
りながら夜に入りぬ。

夜十時燈をとりて、外を覗へば、飛雪猶紛々たり。

(徳富蘆花「自然と人生」)

濛々  
モウモウ。霧雪  
などの爲にうす  
ぐらきさま。

徳富蘆花  
名は健次郎。小  
説家。熊本縣の  
人。昭和二年歿。  
年六十。

### 二三 讀書の樂み

一

心ゆたけし

およそ讀書の樂みは、よろこびふかく、山林に入らずして心しづかに、富貴ならずして心ゆたけし。このゆゑに、人間の樂みこれにかふるものなし。一日書を讀むの樂み至れるかな。聖賢の書を見て、その心を得て樂しむは、たのしき事の至りなり。その次に、古の事を記せる史には、我が國は神武天皇より今年まで二千三百七十年、唐土は黃帝より今まで四千四百年の間の事を載せたり。この故に、からやまとの史を見れば、遠き古のあと、目のあたりに明かに見えて、

二千三百七十年  
寶永七年。

黃帝  
支那上古の皇  
帝。

わが身宛もその世に遭へる心地して、數千年の齡を保てるが如し。この樂みも亦大いなるかな。今日の前なる事のみを見て古の書を知らざるは、極めてかたくななり。古き書を見ず、古の道を知らざる人は、萬の理に暗く、諸の事を知らず、夢見て覺めざるがごとく、迷ひて一生をすごす。これ大いなる不幸なるかな。凡そ古今の書に通じて、理を極め事を知らば、わが心の中、萬物の理、見る事聞く事に疑なくして、大いなる樂みなるべし。古の史を知らずんば、からやまと古今天地の中にみちくたる理も事も、皆通ぜずして、暗しといふべし。

四時に隨ひ、月花を翫び折々の景物を愛で、その折節にか

翫ぶ  
モチアソブ。



樂まむこそ……  
わざなるべけれ。

五字の句  
詩のことをいふ。

左氏が書  
春秋左氏傳をいふ。

なひたる、唐の大和の古き歌を誦して心に樂しまむこそ、自ら作る勞なく、たやすくして、いと面白きわざなるべけれ。もろこしの古、その才餘りありし人も、時に臨みて、その折にかなへる古き詩をかれこれ引きて、その情を敍べしためし、左氏が書などに多く載せたり。これわが作らむより、古めかしく、理まさりて、人を感じしむる事深かりしにや。古の事法とすべし。我が如き輩才拙くて詞を巧にせむとする苦み、いと煩はしく覺ゆ。もし天才ある人、たやすく作り出ださむは、興あるべし。されど、そも五字の句を吟じ成して、一生の心を用ひ破るは益なし。

およその事、友を得ざれば爲し得べからず。唯讀書の一

天下四海の中

天下四海の中  
讀書の  
樂みは  
天下四海の中  
に  
あ  
る  
こ  
し  
の  
古  
の  
才  
餘  
り  
あ  
り  
し  
人  
も  
時  
に  
臨  
み  
て  
そ  
の  
折  
に  
か  
な  
へ  
る  
古  
き  
詩  
を  
か  
れ  
こ  
れ  
引  
き  
て  
そ  
の  
情  
を  
敍  
べ  
し  
た  
め  
し  
左  
氏  
が  
書  
に  
ど  
く  
多  
く  
載  
せ  
た  
り  
こ  
れ  
わ  
が  
作  
ら  
む  
よ  
り  
古  
め  
か  
し  
く  
理  
ま  
さ  
り  
て  
人  
を  
感  
じ  
し  
む  
る  
事  
深  
か  
り  
し  
に  
や  
古  
の  
事  
法  
と  
す  
べ  
し  
我  
が  
如  
き

至樂  
シラク。

事は、友なくてひとり樂しむべし。一室の内に居て、天下四海の中を見、天地萬物の理を知る。數千年の後にありて、數千年の前を見る。今の世にありて、古の人に對す。わが身愚にして、聖賢に交はる。これ皆讀書の樂みなり。およそ萬のことわざの中、讀書の益に如く事なし。然るに世の人これを好まず。その不幸甚だし。これを好む人は、天下の至樂を得たりといふべし。

二

四時につきて、いつともわかず、ふるきふみ見る事を樂しみ、つねにしてやむべからず。なんぞ只三餘の時にかぎるべきや。

三餘  
讀書に最も適當なる冬と夜と陰雨の時との稱。

セイジン  
トりのもの  
トイシ

經傳  
ケイデン。經は  
聖人の書、傳は  
賢人の著述。

たふとぶ  
狄仁傑  
唐の名臣。則天  
武后に仕へて大  
功あり。

名教  
聖人の教。

貝原益軒  
名は篤信。筑前  
(福岡縣)の人。  
正徳四年歿。年  
八十五。(二二九  
〇―二三七四)  
益軒十訓  
益軒の教訓書中  
の主なるもの十  
種を集めて一冊  
としたるもの。

春夏は日の長きを愛し、秋冬は夜のながきをよろこぶ。折を得て楽しむべし。日ながけれど事しげく、客おほければいとまなし。夜はしづかにして書を見るに功多し。およそ、日ひと日夜ひと夜、ふみ見る益は、いかなる富貴の楽しみにもかへがたし。經傳をよめば、見るたびに聖賢の教をまのあたり聞くが如し。たふとぶべき事がぎりなく、空しく過ぎぬる隙をしむべし。狄仁傑の「名教の内至れる楽しみあり、なんぞ俗人とかたることを好まんや」といへるもうべなり。

(貝原益軒「益軒十訓」)

犬と絲櫻



長澤蘆雪筆

ここの  
かきと  
の  
こらと  
かある

宵の口

つひに

かほそい  
細い。  
めいるやうに

自修文

一子犬

嬉しいにつけ悲しいにつけて、憶ひ出すのはボチの事だ。  
忘れもせぬ、祖母の亡くなつた翌々年の春雨のしとくと降る、  
薄ら寒い或夜のことであつた。私は例の通り宵の口から寝てし  
まつたが、ふと目をさますと、遠くでかすかにきやんくといふや  
うな聲がする。不思議に思つて、耳を澄ましてゐると、次第に大き  
く高くなつて、つひには確かに門前に聞える。疑もなく、子犬の啼  
聲だ。時々咽喉でも締められる様に、けたましくきやんくと  
啼立てる。其の聲尻が、やがてかほそく悲しげになつて、めいるや

欠伸  
アクビ。

馴染  
ナジミ。なれし  
たしむこと。  
いたしけ  
痛はしいこと。

うに、遠い〜處へ消えて行く。と思へば、忽ち又近くで堪へきれぬやうに啼出して、く〜と鼻をならすやうな時もあり、ぎやおと欠伸をするやうな時もある。

私は元來動物好きで、わけても犬は大好きだから、近處の犬は大抵馴染だ。けれども、こんなかぼそいいたいけな聲で啼くのは、一匹も無い筈だから、不思議に思つて、そつと夜著の中から首を出す

と、

「どうしたの。寝られないのかえ。」

と、母が寝返りを打つて、こちらを向いた。私は此の返答をさし措いて、

「あれは白ぢやないねえ、お母さん。もつと小さい犬の聲だねえ。どうしたんだらう。」

「棄犬さ。」

棄

「棄犬つて、なあに。」

「棄犬つて……誰かが棄てていつたのさ。」

私はしばらく考へて、

「誰が棄てていつたんだらう。」

「大方、何處かの……何處かの  
人さ。」

何處かの人が犬を棄てていつたと、私は二三度繰返して見たが、分らない。

「どうして棄てていつたんだらう。」



犬 ころ

母は「うるさいよ。」ともいはないで、何處までも相手になり、その意味を説明してくれて、

「まうおそいから黙つておやすみ。」と、優しく言つて、彼方を向いてしまつた。

私も亦夜著を被つた。犬は門前を去つたのか啼聲が稍遠くなる。寝られぬまゝに、私は夜著の中で、今聞いた母の説明を繰返し繰返し味はつて見た。まづ何處かの飼犬が縁の下で兒を産んだとする。小さなむくくしたのが重なり合つて、首を擡げて、みいみいと乳房を探してゐる處へ、親犬が餘處から歸つて来て、そのそばへどさりと横になり、片端から抱へ込んで、べろく舐めると、小さいから舌の先でたわいもなくころくと轉がされる。轉がされては大騒ぎして起返り、又よちくと這ひよつて、ぼつちりと黒

擡ぐ  
モタぐ。

たわいなく

鼻面  
ハナヅラ。

産毛  
ウブゲ。

くむ  
ふくむに同じ。

い鼻面で、お腹を探り廻り、漸く思ふ柔かな乳首を探り當てて、あわててちゆうと吸附いて、小さな両手で揉立てく吸ひだすと、甘い温かな乳が、どくくと出て来て、咽喉へ流れ込み、胸を下つて何とも言へずおいしい。と、腋の下から、まだ乳首にありつかぬ兄弟が、鼻面で割込んで来る。とられまいとして、産毛の生えた腕を突張り、大騒ぎをやつてみるが、到頭とられてしまひ、又そこらを尋ねて、他の乳首に吸附く。其の中にお腹も一杯になり、親の肌で身體が温まつて、融けさうな好い心持になり、ついうとくとなると、くんだ乳首が脱けさうになる。夢心地にもあわてて、又吸附いて、しきり吸立てるが、直ぐに又たわいなくうとなつて、乳首がつひに口を脱ける。脱けても知らずに口を開いて、小さな舌を出したなりで、一向正體がない。

窮屈

足搔  
アガキ。

濡れしよぼたれ  
濡れて半のたる  
ること。

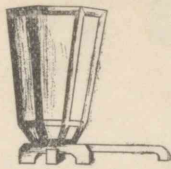
其の時、忽ち暗闇からもじやくと毛の生えた、節くれ立つた大きな腕がぬつと出て、正體なく寝入つて居る所をむづと引つ撮み、宙に吊す。驚いて目をぱつちりあき、いたいな聲で悲鳴をあげながら、四足を張つて藻搔く中に、頭から何かで包まれたやうで、眞暗になる。窮屈で息が詰りさうだから、出ようとするが、出られない。しばらく藻搔いて居る中に、ふと足搔が自由になる。と、襟元を撮まれて、高いく處からどさりと落された。うろくとしてそこらを見廻すけれど、何だか變な寂しい眞暗な處、誰も居ない。茫然としてゐると、雨に打たれて、見る間に濡れしよぼたれ、怖ろしく寒くなる。身慄ひ一つして、くんと親を呼んで見るが、何處からも出て來ない。途方に暮れて、よちく這ひ出し、雨の夜半を唯ひとり、温かな親の乳房を慕つて、悲しげに啼き廻る聲が、先刻一

居たまらない  
ぢつとしてゐら  
れないこと。

絶入る  
息が絶えるこ  
と。

度門前へ來て、又何處へかさまよつていつたやうだつたが、それが何時か又戻つて來て、何處をどう潜り込んだのか、今は啼聲がまさしく玄關先に聞える。  
「お母さん、お母さん、門の中へ這入つて來たやうだよ。」  
と、私は何だか居たまらないやうな氣になつて、又母に言掛けると、母は氣の無ささうな聲で、  
「さうだね。」  
「出て見ようか。」  
「出て見ないでも好いよ。寒いぢやないかね。」  
「だつて、あら、あんなに啼いてゐる。」  
と、折から聞える絶入りさうな啼聲に、私は我知らずむつくり起きあがつたが、何だか一人では怖いやうな氣がして、

雪洞  
ボンボリ。おほ  
ひをかけ、柄の  
ついた手燭。



掉  
ふる。

「よう、お母さん、行つて見よう。よう。」  
「本當に仕様がなない兒だねえ。」  
と、口小言を言ひく、母もしぶく起きて、雪洞を點けて立ちあがつたから、私も其の後に、ついて、玄關と云つてもついで次の間だが、玄關へ出た。  
母が靴脱へおりて、格子戸の掛金を外し、がらりと雨戸を繰ると、颯と夜風が吹きこんで、雪洞の火がちらちらと靡く。其の時小さな鞠のやうなものが、つと軒下を跳び退いたやうだつたが、やがて雪洞の火先が立直つて、一道の光がさつと戸外の闇を破り、雨水の處々に溜つた地面を、一筋細長く照らし出した處を見ると、つい其處に、生後まだ一箇月も経たぬ、むくむくと太つた、赤ちやけた子犬が、小指ほどの尻尾をちぎれさうに掉立てて、此方を見上げてゐる。

なり

青貝  
青色に光る美しい貝。螺鈿をいふ。

なりは私が寝て居て想像したよりも大きかつたが、果して全身雨に濡れしよぼたれて、泥だらけになり、だらりと垂れた、割合に大きい耳から雫を滴らせ、ばつちりと二つの眼を青貝のやうに並べて光らせてゐる。  
「おや、まあ、可愛らしい。」  
と、母もつい言つてしまつた。況んや私は犬好きだ。ぢつとして見ては居られない。母の袖の下から首を出して、ちよつくと呼んで見た。  
すると、さほど怖れた様子もなく、ちよくと側へ来て、流石に少し平べつたくなりながら、頭を撫でてやる私の手を、下からぐいぐい推上げるやうにして、べろくと舐め廻し、手をくれるつもりなのか、頻りに圓い足を舉げて、はたくやつてゐたが、果はやんは

咬む  
カむ。

りと痛まぬほどに小指を咬む。母の顔を見上げながら、少し鼻聲を出して、

「お母さん、何か遣つて。」

「遣るのも好いけれども、居附いてしまふと、仕方がないからねえ。」と、口では拒むやうな事を言ひながら、それでも臺所へ行つて、缺けた茶碗に冷飯を盛つて、何かの汁を掛けて来てくれた。

早速靴脱へ引入れて是を當てがふと、子犬は一寸香を嗅いで、すぐうまさうに、まづびちやくと舐めだしたが、汁が鼻の孔へ入ると見えて、時々くしんくと小さな嚏をする。忽ち汁を舐めつくして、今度は飯にかゝつた。他に争ふ兄弟も無いのに、頻りに小言を言ひながら、がつくと食べだしたが、飯は未だ食べなれぬかし

居附く

嗅ぐ  
カぐ。

談判

棧俵法師  
サンダラボウシ。米俵の上下にふたとして用ひる藁にて作れる圓く平たきもの。



子 供 と 犬

て、兎角上顎に引附く。首を掉つて見るが、そんな事ではなかなか取れない。果は前足で口の端を引搔くやうな真似をして、大藻搔きに藻搔く。

此の隙に私は母と談判を始めて、

「今晚一晚泊めて遣つて。」

と、雪洞を持った手にぶらさがると、母は一寸澁つたが、まうかうなつては爲方がない。

「お父さんに叱られるけれど。」と言ひながら、棧俵法師を捜してそれは好かつたが、其の晚一晚啼

来て、靴脱の隅に敷いて遣つた。



きとほされて、私はちつとも知らなかつたが、お蔭で母は父に小言を言はれたさうな。

犬嫌ひの父は、泊めたその夜を啼き明かされると、うんざりしてしまつて、翌日は是非逐出すと言出したから、私は子犬を抱いて逃廻つて、どうしても放さなかつた。父は困つた顔をしてゐたが、しかしそれも一時の事で、そのうちに子犬も獨寝に慣れて、夜も啼かなくなるゝと、逐出す筈のものに何時しかポチといふ名まで附いて、姿が見えぬと、父までが一緒に捜すやうになつてしまつた。

(二葉亭四迷—平凡)

二葉亭四迷  
長谷川辰之助。  
小説家。東京外國語學校出身。東京の人。明治四十二年歿。年四十八。

## 二 新緑の奈良

奈良はいつ來ても好いが、殊に新緑の頃が好い。櫻の頃に來た時には、まだ黄いろく枯れたまゝであつた芝は、生き／＼と青んで、鹿がその上に寝ころんだり、又その青い芽をたべたりしてゐた。猿澤の池の柳は、萌黄色をした其の若々しい美しさが、稍老いて、こんもりと葉を茂らしつゝ、水に映つてゐた。春によく來る、團體の客のざわめきも、今はなくて、池の縁にあるベンチには、木蔭を求めて子供を遊ばせてゐる女があるばかりだつた。荒池のほとりは、なほ靜かだつた。奈良ホテルに沿うて、葉櫻の暗いほどの小徑を歩くのも好かつた。池には遠くの興福寺の塔の影が映つてゐた。其の水に石を投げて水の輪が出来るのに興

萌黄色  
青と黄との間の色。

ざわめき

興福寺  
法相宗の大本山。藤原氏の氏寺として盛大を極めたりき。

じる子供たちもゐた。一つの輪が廣がつてそれが消えてゆくのを待つては、他の子供が石を投げるのであつた。

梅の木が林をなしてゐる處では、園丁が其の枝をおろしてゐた。

芝の上に落ちた青葉には、鹿が寄つて来て香を嗅いでゐた。



春日神社廻廊

鶯の池のほとりには、躑躅が燃えるやうに咲いてゐた。ボートを浮べて漕

ぎ廻つてゐる人達があつて、水の光も夏らしかつた。浮見堂に足を休めてゐると、水を渡る

風が快く訪れる。

燃える

高圓山

タカマドヤマ。奈良市の東南方にあり。

あせび

馬酔木。石南科に屬する常緑灌木。



春日の社

春日神社。官幣大社。武甕槌命・經津主命・天兒屋根命・比賣命を奉祀す。

せびる

嫩草山、高圓山が、それ／＼にこんもりとして輝いてゐた。高畑

のからりとした芝生の上には、大きな花が咲いたやうに、美しいバラソルが動いてゐた。あせびの花は大抵すがれてゐたが、其の花の多い谷のやうになつた路には、美しい影が出来て、こまかく洩れてひそんでゐる光の戯れも面白かつた。

春日の社に近い杉の木立は、夏らしく黒み渡つて、その葉の先から愛らしい浅緑の爪のやうな若葉が出てゐた。參詣の人の多く通る道には、鹿が澤山待受けてゐた。私は煎餅を手に持つてゐるだけ、皆與へてしまつたが、彼等は圓々とした可愛い眼を、私に向けて、いつまでもせびるやうに躑いて來た。一つの鹿は、私の前で首を上げたり下げたりした。それは御時儀なのだつた。私は、おとなしく私の前に脚を折つてゐる鹿の背を、犬にでもするやうに撫

鹿子斑  
カノコマダラ。

でてやつた。文字通り、鹿子斑の其の肌はつやくしかつた。五月は毛並の光澤の一番美しい時だといふ事である。ぬけ換つてまだ間もない角は、やつとY字形になつたばかりで、赤みを帯びて、柔かさうだつた。手に握つてみると、其の赤い色の血のぬくみが感じられた。

南大門  
東大寺の總門。

南大門の通りには、燕が澤山飛んでゐた。そこらに佇んでゐる鹿の細く高い脚の間を、すり抜けるかと思ふやうに飛んだり、角細工などの土産物を並べてゐる店の軒に、ついと飛入つたりしてゐた。



池の澤猿

大佛殿

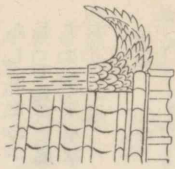
東大寺の金堂。  
東大寺は華嚴宗の大本山。

戒壇院

東大寺に屬す。  
僧に戒を授けるために設けた壇のある堂。

鴟尾

シビ。



轉害門

天平年間（聖武天皇の御代）の建築といふ。



春日野

大佛殿を左へ、松林の間を行く路の感じも好かつた。草が長く伸びるまゝになつてゐる向うに、實に古い堂が見える。それは戒壇院らしかつた。顧みると、大佛殿の屋上の鴟尾が、金光燦爛として松の間に高く聳えて、松の梢には蟬がじい〜と鳴きはじめてゐた。

轉害門は、奈良に残つてゐる建築のうちでも、最も古いものの一つであるが、その簡素にして雄大な結構は、すばらしいものだと思つた。私は其の門をはひつて、大

きんぼうげ  
金鳳花。うまの  
あしがたの一  
名。毛茛科に屬  
する多年生草  
本。



木の芽  
山椒の若葉をい  
ふ。  
春日山  
嫩草山の南方に  
竝ぶ。

佛殿の裏を歩いた。竹がわつさりと路に垂れてゐたり、柿カキの若葉が日を照りかへしてゐたりした。古い寺院の土塀とびが崩れた事によつて、却つて繪畫的に見えるやうな、淋しいひつそりとした道だつた。築地の裾にはきんぼうげが咲き、白い小さい蝶が休んでゐた。

嫩草山の前の茶亭で晝飯をたべた。木の芽キノコの吸物すくもつを出した。嫩草山と春日山との間にある、谿の道は、若葉の緑が顔にうつるやうな朗かな感じの處だつた。爪先上りに苦しくないほどの登りになつて、山の奥に蹈込んでゆく。洞の楓カエデといふ名のついてゐる通りに、楓がトンネルのやうになつてをり、高い木には藤があちらにもこちらにも咲き垂れてゐた。奈良は藤の花の多い處だが、公園の茶亭のそれなどは、大方すがれてしまつてゐるのに、こゝだけ

かまきり  
螳螂。直翅類に  
屬する昆蟲。

荻原井泉水  
名は藤吉。俳人。  
東京帝國大學出  
身。東京市の人。  
明治十七年生。

はまだふさふさとした紫を垂れて美しかった。歩けばさすがに暑さをおぼえる。道に沿うて綺麗な流があり、流に臨んで古風な亭がある。そこに私は腰をおろした。青いかまきりの子が、若い芒ヒメギクの葉先にとまつてふらくとしてゐた。奈良の若葉はいゝなと私は今更のやうに思つた。

私は緑の深い中を縫ひながら、あてもなく歩いた。

(荻原井泉水—観音巡禮)

椿落ちてきのふの雨をこぼしけり

蕪村

### 三 最後の授業

あの朝は、随分遅く學校に出掛けたので、先生からお小言を頂戴するのが大變怖かつた。學校を怠けて、野原へ遊びに駈出してしまはうかといふ氣が、ちらつと頭をかすめた。時候は暖かだつたし、空氣は澄み切つてゐた。森の外れには、鶉の啼聲が聞え、製材場の後の牧場には、プロシヤ兵が練兵をしてゐた。何かから何まで、教室よりも、ずつと強く私を惹きつけたのであつたが、私はそんな誘惑を拂ひのけて、學校の方へ駈けて行つた。

役場の掲示板の前に、幾人か人が立つてゐたので、何の告示だらうかと不審に思つたが、そのまゝ、其處の廣場を通り抜けようとすると、鍛冶屋が私に聲をかけて、



鶉  
ツグミ。燕雀類  
に屬す。

誘惑  
イウワク。  
鍛冶屋

「よう、そんなに早く走つて行かなくつてもいゝよ。學校には十分間に合ふよ。」

と云つた。私は、鍛冶屋がからかつてゐると思つたので、どんな意味か、別に考へようともしなかつた。校庭に著いた時には、息が切れて、頭ががん／＼鳴つてゐた。

何時も、授業の始りは非常に騒々しくて、机の蓋をばた／＼閉ぢる音、書物を手荒く取扱ふ音、だらしなく歩む重い靴の音、先生が定規を軽く叩かれる音、それから「もつと靜かに、靜かに」といはれる先生の聲などが、街にゐても聞える程であつた。

私はこの混雜に紛れ込んで、誰にも氣附かれず自分の席に著かうと、當にしてゐたのだつたが、今日はまるで日曜日のやうに、何も彼もひつそりしてゐた。私は、教室の戸を開けて中に入るより外

閉ぢる  
定規  
チャウギ。

赧らむ  
アカらむ。

に爲方が無かつた。私がどんなに頬を赧らめ、どんなにびく／＼してゐたかは、あなたがたは想像することが出来るでせう。ところが、案外にも、何事も起らなかつた。先生は怒りもしないで、私を見てもの優しく、

「フランクさん、早く席にお著きなさい。君に構はず、授業を始めるところです。」

と言はれた。私はすぐ自分の机に著いて、腰掛けた。さて先づ氣附いたことは、先生が綺麗な長い緑色の上著を著て、何時もは訪問日に用ひられる黒い絹の帽子を被つて居られることであつた。そして級全體が妙に靜肅に見えた。併し一番私を驚かしたのは、何か事件の持上つた時以外には、決して來た事の無い村人達が、教室の後に居ることであつた。その人達は皆黙々として腰掛けて

綺麗

靜肅

黙々

ゐた。そして誰も彼も悲しさうに見えた。

「ハウザア老人は、持つてきたぐちゃ／＼の初級用の讀本を、自分の膝の上に擴げてゐた。私には一體何のことだかまるで解らなかつた。」

それから、先生は立上つて、同じ調子で妙にもの優しく、  
「皆さん、これが私の最後の授業です。今後、アルサスとローレンとの學校では、ドイツ語だけで授業をせよといふ命令が、ベルリンから來ました。明日新任の先生がみえます。是がフランス語で教へる最後の授業です。皆さん、よく氣を付けてゐて下さい。」  
フランス語での最後の授業！ 私はフランス語の書き方がやうやく解つた。それといふのは、私はこれまで決して勉強した事がなかつたのだ。私が書物を見た時、今まで非常にむづかしく、退

アルサス・ローレン  
共にフランス東部の一地方。當時プロシヤに屬し、大戦後フランスの有に歸す。常に獨・佛二國間にて所屬上問題となりし地方。

堪へられぬ

屈なものに思はれたその書物が、別れに堪へられぬ私の舊友のやうに思はれた。今になつて、何もかも皆解つた。揭示板の告示はこれであつたのだ。村の老人達の臨席も、此の最後の授業のためであつたのだ。是が四十年間精勤して下さつた先生に對する感謝と、彼等の愛する郷土に對する敬意とを示さうとする方法であつた。

不圖  
フト。

不圖、私は名を呼ばれた。暗誦の順番が廻つて來たのだつた。私は文法の規則を、最初から終りまで、例外も何もかもちつとも間違ひなく言ふことが出來たら、どんなに嬉しかつたであらう。併し、私は、先づ最初の語句からやり損つて、頸を垂れたまゝ、上げもしないで、恥ぢらつて立つてゐた。すると次のやうな先生のお言葉が耳に入つた。

恥ぢらふ

「フランクさん、私は君を叱らうとは思つてゐません。君は今日までに十分罰を受けてゐます。過失は君ひとりに限つたことではない、皆がさうでした。『なあに時間はたつぷりある。勉強は明日にしよう。』と誰しも考へてゐました。ところでそれはどんな結果になりましたか。そこらに居るプロシヤ人から『おい、君はフランス人だといふ様子をしてゐるが、自分の國語を話すことも書くことも出來ないではないか。』と言はれても、返す言葉はないでせう。」

それから、先生はフランス語の話をされた。フランス語は、世界で一番美しい言葉であり、一番はつきりしてゐて、一番力強い言葉であるといふことや、我々は此の言葉を大切に、決して忘れないやうにすべきことなどを話された。その譯は、どんな國民でも、その國の國語を守つてゐる間は、征服されることは斷じてない、國

明瞭  
メイレウ。あき  
らか。

しまひたい

語は牢獄を開く鍵であるから、といふのであつた。  
 それから先生は、文法書を取上げて、讀んで下さつた。私はそれ  
 がやさしいのに驚いてしまつた。先生の言はれることは、總て非  
 常に明瞭簡單に思はれた。それもその筈で、私は今までこれほど  
 注意深く聽いたことはなかつた。しかし、先生もこれほど熱心に  
 説明して下さつたこともなかつたと思ふ。氣の毒にも、先生は、知  
 つてゐられるだけのことを、此の授業時間中にすつかり話してし  
 まひたいと思つて居られるやうであつた。  
 それから今度は習字だ。新しいお手本が綺麗な紙片に次のや  
 うに書かれてあつた、

フランス フランス  
 France, France,  
 フランス フランス  
 France, France,  
 フランス フランス  
 France, France,  
 フランス フランス  
 France, France,

檐下  
ノキンダ。

是等の文字は、恰も机上から波打つて來る小さい國旗のやうに  
 見えた。私達是一所懸命にそれを習つた。紙の上にきしむペン  
 の音を聞きとることが出來た。檐下に靜かに鳴いてゐる鳩の聲  
 を耳にした時に、  
 「鳩もドイツ語で歌ふのかしら？」  
 と私は獨言を言つた。  
 時々、私がそつと見ると、先生はぢつと椅子に腰掛けて、自分の小  
 さい教室の光景を心に刻みつけて行かうとするやうに、あたりの  
 一事一物を眺め廻して居られた。四十年間、先生はこの同じ場所  
 に、自分の級の生徒を前に控へて腰掛けて居られたのであつた。  
 そして、明日は永遠に此の場所を立去られるのであつた。  
 それでも、先生は健氣にも最後まで皆の暗誦を聞かれた。習字



震へて

が終ると歴史で、その次には小さい子供達が初歩の學課をお經を讀むやうに唱へた。——ba, be, bi, bo, bu, 鍛冶屋の爺さんは、眼鏡を掛けて、子供等と一緒に練習をした。爺さんの聲は、かなり震へてゐた。その聲が妙に聞えるので、私達はよく笑つたが、併し又泣かずには居られなかつた。

時計が鳴つた。正午だ。其の瞬間、練兵から歸るプロシヤ兵の歩調が聞えた。先生は、つと立上られた。顔は蒼ざめ、背が此の時ほど高く見えたことはなかつた。

「皆さん、皆さん——」と先生は言はれたが、何かしら先生の息をつまらせるものがあつた。先生はその先を續いて話されることが出来なかつた。話すよりも考へられたのか、先生はくるりと黑板の方を向いて、チョークを取上げて大きいきつぱりとした字で、

チョーク  
白盤。

Vive la France !

(フランス萬歳！)

と書かれた。

それから先生は、壁に向つて顔を隠し、私達に出て行つてもいと云ふ手眞似をなされただけで、少しも口を利かれなかつた。

(アルフォンズ・ド・デー)

アルフォンズ・ド・デー  
フランスの小説家。劇作家。(一八四〇—一八九七)

主要文字形象表

☉ 日	心 心	女 女	子 子	弓 弓	川 川	山 山
爪 爪	犬 犬	牛 牛	手 手	水 水	木 木	月 月
石 石	夫 夫	目 目	皿 皿	瓦 瓦	瓜 瓜	戶 戶
虫 虫	白 白	耳 耳	糸 糸	竹 竹	包 包	甲 甲
貝 貝	角 角	豕 豕	州 州	交 交	衣 衣	舟 舟
高 高	馬 馬	首 首	飛 飛	門 門	車 車	身 身
龜 龜	鼠 鼠	象 象	巢 巢	鹿 鹿	鳥 鳥	魚 魚

主要象形文字表





文部省檢定

高等女子學校國語科用 昭和九年十一月二日

昭和九年七月一日印刷  
昭和九年七月五日發行  
昭和九年十月廿五日訂正再版印刷  
昭和九年十月廿八日訂正再版發行



發行所

東京市神田區錦町三丁目二十五番地  
大阪市南區順慶町一丁目五十三番地

最新女子國文讀本（全十冊）

定價各金六拾錢

編者 佐佐木信綱

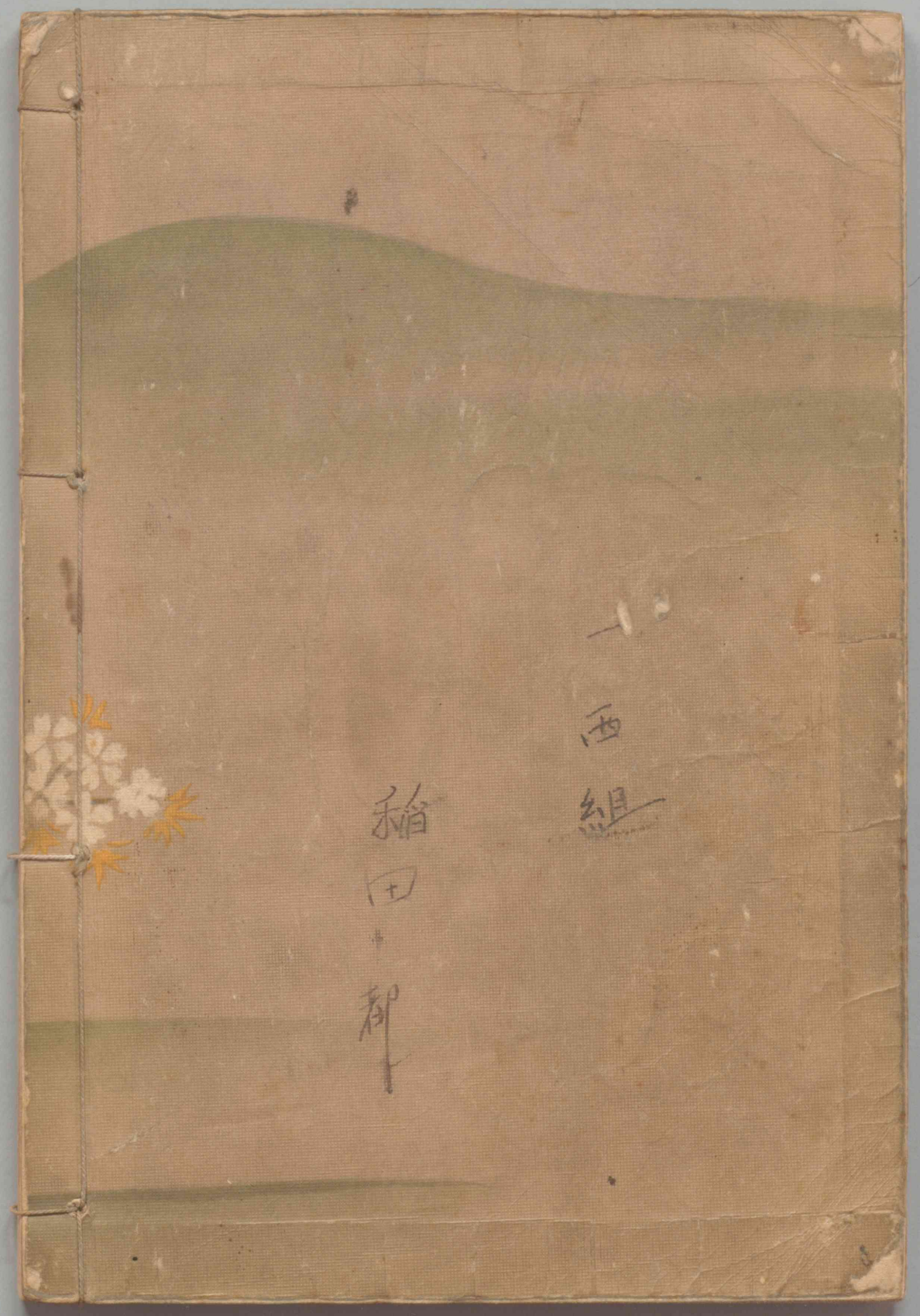
編者 武田祐吉

發行者 湯川松次郎  
東京市神田區錦町三丁目二十五番地

印刷者 井下精一郎  
大阪市西區阿波座中通三丁目四番地

湯川弘文社





西組

稻田都